宵待草の憂鬱

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宵待草の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ００９４Ｑ

【作者名】
由城　要

【あらすじ】
それはまるで宵待草のように。霊魂となった青年と霊感女子高生のメランコリックストーリー。

序章　それは宵待草のように

『――　何、あんた』

俺の記憶は、ここから始まっている。

不機嫌そうなこの声に振り向いたその瞬間から。

『……？』

ふいを突かれて、声を出すことが出来なかった。

長い間、話すことが出来なかったせいか、それとも言葉さえも忘れてしまったのか。

月夜が照らし出したのは、俺と同じくらいの年頃の制服を着た女の子。

彼女は曲のない長い黒髪を風に揺らしながら、しっかりとした目で俺を『見て』いた。

『――　あんた、誰？』

不信そうな瞳の奥に、恐怖心はなかった。

近くの車道の音しか聞こえてこない都心の公園に、その言葉はやけに大きく響いた。

声を出せずにいる俺に、彼女は一層眉をしかめる。

答えなくては。

そう思うのに俺の口からかろうじて紡ぎ出すことができたのは、この一言だけだった。

『――　分からない』

脳裏に浮かぶのは、霞がかった月夜の風景。
たった、それだけ。

『ずっと月を見ていた気がする……。それしか……覚えてない』

『自分の名前も？』

『自分の名前も。今までのことも。……これから何をすればいいのかも』

俯く俺に、彼女は少しだけ困惑したように口を開き……そして告げた。
また、満月が空に昇っていた。
月光の照らしだす丘の公園に、風がゆっくりと通り過ぎていった。

『――　自分が、死んでることも？』

梅雨に濡れた草木が揺れていた。
それでも月は、光り続ける。

第1章　月を待つ男

駅裏の通りは薄暗く、人の姿はなかった。
電球の切れかけた古い電柱が意味なくそこに存在しているだけ。時折儚い小さな明かりが付いては消え、付いては消え…を繰り返し、侘びしい風景をさらに際立たせていた。
近くから聞こえてくる電車と遮断機特有の音が混じり合う住宅街の外れ。闇の中に雑音が消え去るとふと物悲しいような、そんな空虚な気持ちが心の中を通り過ぎていった。
通りの少し奥に足を踏み入れると今度は暖かな明かりを灯した住宅地が視界に入ってくる。密集された家々の中で小さな家庭という集まりをつくり、狭い土地の中で細々と生きている人々。虫の音すら聞こえることのない都会の一角で無数の家々が明かりを灯していると、それがどれだけちっぽけなものなのか嫌でも分かってくる。
密集された家々の間を通り過ぎると、小さなアパートが見えてきた。俺はその建物を見上げ、足を止める。
築数十年を思わせる古ぼけたアパートには、どこから生えてきたのか分からない雑草のツタや汚れがいたるところにあった。2階へ登る階段は中途半端な駐車スペースの脇から上へとのびている。
駐車場には律儀に車が一台駐車していて、その隣には一本の大きな杉の木がまるで影をつくるかのように伸びていた。階段前の郵便物入れには6つ、住人の名前が書かれていた。　階段を登る音を聞いて、俺は見つめていた郵便物入れから目を離す。先に2階へ上がろうとしている彼女の背中を追って、その後についていった。
長い黒髪が、風に揺れる。梅雨時の湿った風が、今にも雨を降らせそうな気配を残して通り過ぎてゆく。
曲のない彼女の髪がさらさらとなびいていた。衣替えしたばかりの汚れ一つない制服。そしてコンビニで買った夕食の袋をぶら下げ

て彼女は足早に階段を登っていった。
２階の一番端の部屋は、駐車場の杉の影になって少し薄暗くなっていた。玄関前の蛍光灯に小さい虫達が群がっている。しかし彼女はそんなものには目もくれず、扉の前まで来ると鞄の中にしまっていた鍵を探し始めた。
『榊　留衣』と扉の表札にはそう書いてあった。これが彼女の名前だろうか？
そんなことを考えているうちに鍵を開けた彼女はドアノブを捻るガチャ、という音と共に電気の付いていない薄暗い部屋の中に、外からの蛍光灯の光が差し込んできた。
彼女は無言のまま玄関で靴を脱ぎ、部屋の電気をつけた。いままで外にいたせいか、天井の明かりがやけに眩しい。
部屋の中は女の子の部屋と思えないくらいさっぱりとしていた。テレビのあるダイニングにはコップや茶碗の並んでいる棚と電話機、小型のテーブル、テレビ、そしてある程度の大きさのあるソファーが置いてある。
彼女はそのソファーに座り、コンビニの袋から今日の夕食を取り出した。それらに手をつけながら彼女は一旦途切れた会話を繋げる。

「…それで？」

ドアの所に立ちすくんでいた俺は、とりあえず腰を下ろすことにした。

『それで？って言われても』

膝を抱え込むようにして座り込んだ俺に、彼女は至極嫌そうな表情をしてみせた。

「あんた、さっきから何も考えてないんじゃない？少しはこっちの

迷惑も考えてみてよ」

初対面の人間に対して、彼女の言葉は容赦ない。
彼女は俺に言い訳させる隙を与えず、テレビを付けてそちらに視線を向けた。

「――で？この状態どうにかなんないわけ？」

彼女は興味なさそうにバラエティーを見ながら、そう言う。俺は自分の両手を見つめ、途方に暮れたように言い返した。

『俺だってまだ頭ん中混乱してて…何がなんだか』

視界に入った両手は、下のフローリングが透けて見えるくらい透明になっている。辛うじて手の輪郭は分かるのだけれど…。

「…とりあえず、自分が死んでいることは理解できる？」

ため息一つして面倒臭そうにそう言った彼女の言葉を聞いて、俺はその現実をまざまざと思い知らされる。

『…なんとか』

俺には、彼女に声をかけられるまでの記憶が全くない。気付いた時にはあの公園で、月を見上げていた。
だから、自分が死んでいることにも気付いていなかったのだ。

「『なんとか』じゃなくてはっきりして。うざったい」
『しかたないじゃん。はい、あなたはもう死んでますとか急に言われたって困るだろ？』

対する彼女は至極嫌そうな顔をしてこちらに割り箸を向ける。
「その仕方ないことに私を巻き込まないでくれる？」
言葉に詰まった俺に、彼女は早口にまくし立てていく。
「確かに声をかけたのは私の油断だったとは思うけど、だからって取り憑いて離れ方が分からないってどうゆうこと？」
言いたいだけ言うと彼女はリモコンを手に取り、テレビのチャンネルを変え、視線をそちらに投げた。どうやら俺に言い訳する時間はくれないらしい。
俺は、自分が死んでいるという自覚が無い。だって普通、人が死んだらこんな風になるなんて誰が予想するだろうか？だいたい死んだ後のことなんて誰が考える？…なのに、理不尽な神様はどうやら俺に幽霊になることを強要したようだ。
しかも、こんな性悪女に取り憑く羽目になろうとは。
実際、俺は取り憑こうと思って取り憑いたわけではない。別に呪ってやろうとか、自分が死んで他の奴が生きてるのが悔しいからとか、そんな気分だったわけでもない。だって自分が死んでることさえ気付かなかったんだ、どうやって人に取り憑こうなんて考える？
そんな俺の言い訳は口に出されることなく、虚しくもテレビから流れるＣＭの曲だけが部屋の中に響いていた。
項垂れている俺の様子を横目で見た彼女は、盛大なため息をつく。
「反省したんなら次のこと考えたら？どうやって私から離れるか」
『そんなこと言ったって…』
取り憑いてしまった時の対処法なんて今時坊さんでも分からない

だろう。死んだことがないわけだし。
俺の様子に呆れた彼女は、眉間に皺を寄せてまたため息をついた。
いかにも嫌そうな表情を浮かべて言う。

「――　あんたは、このままでいいわけ？」

そんなあからさまに面倒くさい、という顔をされても。俺はもう一度自分の半透明な手を見て、下を向いたまま口を開いた。

『死んでるってことは、生きられないんだよな…？』

こっちの気持ちもお構いなしに、彼女は即答で答えた。

「当たり前でしょう？死んでるんだから」

死。言葉にするのは簡単だけど、表現することの出来ない重い単語。恐いとか、嫌だとか、そういった気持ちは何故か湧いてこなかった。ただ脱力したと言うか、妙に空虚な気分に襲われる。
もう、自分は生きていない。――　何も、出来ない。

「…変な奴ね、あんた」

急に聞こえてきた彼女の声に、俺は間抜けな声をあげてしまった。

『は？』

彼女は日本人形のような黒い髪を耳にかけながら、俺を全部見透かしたような目でこう言う。

「普通、死んでることに気付かなかった霊なら、気付かせてやれば

消えるはずなんだけど」

はずなんだけど、ときつい口調で言われても。なんかさっさと消えてくれ、という風にしか聞こえないんですが。

「……何か思い残したことでもあるわけ？」

頬杖をついて、真っ黒なその瞳をこちらに向けてくる。

『それは…ない、と思うけど…』

口ごもる俺の声を聞いて、彼女は頭をおさえた。ため息をもらして、俺を睨みつける。

「あんた本当に鬱っ陶しい」

『え？』

切って捨てるように、彼女は言い放った。

「選択肢は2つに1つ。成仏するか、そこら辺彷徨って浮遊霊にでもなるか。さっさと決めて」

言いたいだけ言うと彼女はまたテレビに視線を戻した。その冷淡な言い草に少し苛立ったりはしたけれど、彼女の言っていることは間違っていない。

取り憑かれた方にとって、俺はこの上なく邪魔な存在だろう。

俺は何も言えなくなって、ただ天を仰いだ。

☆

梅雨明け、というわけではなかったけれど、久々に快晴になった青空は蒸し暑い太陽を覗かせ、都心の通行人達を苦しめている。人々の行き交う通勤・通学ラッシュの時間帯、駅前は予想以上の混雑を見せていた。

制服や、スーツの人並みに困惑しながら、俺は前を歩く留衣の後ろをついていく。光綾とかかれた制服を着ている留衣は、都内でも有名な私立光綾高校の２年生。

光綾は結構な偏差値を誇る進学校で、共学の高校だ。開襟シャツに、リボン。そしてチェックのスカート。それがこの有名校の制服。

「…何？」

ぼーっと後ろ姿を見ているとその視線に気付いたのか、留衣が至極嫌そうな顔でこちらを振り返った。

『えっ、いや、なんでも』

俺は慌てて首を振る。そんな俺の様子に、留衣はふと目を止めた。

「…そういえば、あんたのその制服…」

『…へ？』

自分で自分を見て、初めて気付いた。濃い赤のネクタイ、Ｙシャツの胸ポケットには、ＳＨと書いてある。どこからどう見ても何処かの学校の制服だ。

『…気付かなかった…』

そう呟く俺に、留衣はまた軽蔑の視線を投げかける。なんだよ、そっちだってさっき気付いたくせに。

「…先に言っておくけど、学校に着いたら静かにしててよ」

留衣は小声でそう言った。蟻の集団のように無数の人々が行き来する街中。きっと誰1人として俺の存在に気付いている人はいない。はたから見れば、留衣は独り言を言っているようにしか見えないのだ。

俺はきっと誰の目にも見えていない。

「分かった？」

ぼうっとそんなことを考えていた俺は、急に聞こえた留衣の言葉に慌てて頷いた。

『あ、ああ。分かった』

聞いてなかった、なんて言ったらどんな暴言で返されるかも分からない。とにかく一応頷いておいて、通学路へと視線を移したその時だった。

「あっ、さーちゃーん！」

俺と留衣の後ろの人混みからそんな脳天気な明るい声が響いてきた。ふと振り返ると、誰かが超高速でこちらに右手を振っている。背が小さいのか、人混みの中をぴょんぴょん跳ねながら『さ～ちゃ～ん』という言葉を繰り返している。近くに友人でもいるのかと何気なくあたりを見回し、視線を留衣に戻した瞬間。後ろから走ってきた、何か小さいものが留衣の背中に激突した。バランスを崩した

留衣が倒れるまで数秒もかからなかった。
俺はぎょっとして激突してきた女の子を見る。

「痛…」
「おはよう～、さ～ちゃん」

呆然としている俺の前でその子は言った。どうやらこのクルクルの髪の毛をした小動物的女の子の言う「さ～ちゃん」とは留衣のことらしい。彼女はぴょん、と留衣の背中から離れると、てへへ、と無邪気な笑顔を浮かべた。
俺はこの命知らずな女の子の行動に冷や汗をかいていた。だが、もうすでに留衣の口元には引きつった笑みが。

『る、留衣？ほら、この子、悪気あったわけじゃなさそうだし…』

フォローもむなしく、留衣は素早くこの小動物の首根っこを掴んで言った。

「……雛。あんた、朝っぱらから誰かに体当たりしないと挨拶の一つも言えないわけ？」
「だって愛情表現だもん～」

対する女の子は、大きな目で頬をぷく、と膨らませた。はたから見れば小学生の行動だが、彼女の持っているのは赤いランドセルではなく、留衣と同じ通学用鞄。そして、制服も……。

『高校生！？』

身長から言っても１４５と少しといったところだろう。１６５以

上ある留衣と並ぶと、お世辞にも高校生とは言い難い。驚きの声をあげている俺に、留衣が「うるさい」という視線で睨みつける。けれどその視線はすぐ俺の後ろへと移った。

「人に抱きつくことでしか表現できない愛情って不毛ですよ、雛さん」

雛、と呼ばれたちびっ子が、ぱぁ、と明るい表情をした。なんだかコロコロと雰囲気の変わるコだ。

「あ、あさっち～」

2人の視線の先を追って振り返ると、そこには同じ光綾の制服を着た、大人しそうな女の子が立っていた。セミロングの髪を風に揺らしている。彼女は片手で鞄を持ち、もう片方の手で口元を押さえて苦笑していた。

「おはようございます、留衣さん」

「…おはよう」

立ち上がり、スカートの砂を払っていた留衣がぶっきらぼうにそう返す。

「藤堂、あんたも何か言ってくれない？そうじゃないとこの小動物、毎日人に体当たりし続けるから」

「う～、あさっちもさ～ちゃんの味方ぁ？」

小動物はまるでハムスターのごとく頬を膨らまし、ぶーぶー言いながら留衣達を見上げた。藤堂、と呼ばれた女の子は、微笑んで言う。

「表現されなくても、留衣さんなら十分分かっていらっしゃいますよ」

2人の会話を横目に見ながら、小声で留衣は俺の方に向き直った。

「あの小さいのが島崎　雛。今話してるのが藤堂　浅海」

『親友？』

問い返す俺に留衣は一瞬面食らって、すぐ顔を背けた。

「…まぁ、ね」

一瞬だけ見えたその横顔は、少しだけ赤くなっているようにも思えた。

『…照れてる？』

「なにか言った？」

振り向かず、留衣はそう言った。笑いがこみ上げてきて吹き出しそうになった。他の2人を引き連れて歩く彼女が一瞬だけこちらを振り返り、俺を睨みつける。多分、後で怒られるんだろうな、と思いながらも俺は留衣の後を追っていった。

☆

鉄筋コンクリート造りのありがちな校舎が見えてくると、俺は校

門の前で一瞬足を止めた。留衣達と同じ制服を着た生徒達を吸い込んでいく大きな建物。鐘の音の響く校舎と、朝練に励む運動部の声が木霊している校庭。ざわめく木々がそこを取り囲み、露に濡れた葉から雫が落ちる。

校門をくぐり校内へと足を踏み入れると、外の熱気が一瞬薄れ、コンクリートの壁が校内の気温を低くしていた。1階の廊下には特別教室といくつかの教室が並んでいて、数人の生徒達が行き来している。反対側の窓からは校庭の様子が見てとれた。

「ね～、さ～ちゃん」

2階の階段に足をかけると、後ろにいた島崎が留衣の制服の裾を引っ張った。何か企んでいそうな目で見つめてくる。それに対して留衣は視線だけを島崎に向けた。

「何？」

「ちょ～っとお願いがあるんだけど…」

両手を組んで可愛らしくお祈りポーズをして、目をキラキラさせる小動物。しかし、留衣は興味なさそうに即答した。

「部の勧誘なら断る」

「えぇっ！？なんで、なんで、なんでーっ！？」

廊下全体…否、校舎全体に響くようなこの大声に耳をふさがないのは留衣と藤堂だけだ。

「部活に入る気はないから」

「なんでっ！部活は楽しいよぅ、それに私もあさっちもいるんだからぁ！」

島崎と藤堂の部活？俺は首を傾げた。この2人、とても同じ部には見えない。ひょっとして、文化部とか？　けど次の瞬間、そんな俺の浅い考えは藤堂の微笑と共に吹っ飛んだ。

「そうですよ。留衣さん、バスケお上手じゃないですか」
「得意なものと好きなものは必ずしも一緒じゃないでしょう？」
「あら、でもバスケをしている時の留衣さん、とても楽しげに見えますよ？」

2人の会話を聞き終えた俺は、一拍おいて叫んだ。

『ば、バスケ部！？』

運動部の中でも一番運動量の多くて一番きつい、あのバスケ部！？いや、もしかしたら、マネージャーとかかも…。　留衣は一瞬こちらを睨んで、そして藤堂に向き直る。

「…藤堂。あんたまで勧誘？」
「はい。部長命令ですから」

にっこりと微笑んで彼女が指差したのは、隣で「さ～ちゃ～ん、バスケ部はいって～」と嘘泣きで懇願している島崎、雛。また驚きで声をあげそうになったけれど、留衣に怒られるので、なんとか我慢した。

「でもぉ、でもぉ…今度の練習試合には出てよぅ。今、選手の1人が怪我しちゃって出れないんだよぅ…」
「…補欠がいるでしょう？後輩だって不足してるわけじゃ…」

がしっ、と島崎が留衣の腕に貼りついた。

「全員一致の意見でもぉ？」

まるで脅しの入ったような言い方だ。何故か島崎の目が怪しく光っている。留衣は無視して歩きだそうとしたが、へばり付いている島崎が動こうとしない。

しばらく留衣と島崎の格闘は続いたが結局、結果は島崎のねばり勝ちだった。留衣はあからさまに面倒くさいという表情を浮かべて、島崎に一瞥くれる。

「…練習試合だけ。大会までは出ないから」

「は～いっ」

留衣とは逆に、周りに花びらを散らすかのように笑顔を浮かべる島崎。留衣は盛大なため息をつくと、さっさと教室へ足を進めた。

４０個の椅子と机が所狭しと並べられている教室。自分の席に鞄を置く留衣を横目に見ながら俺は窓の方へと向かう。眼下に広がる校庭の景色に俺はなんとなく、何か懐かしいような、そんな気分に襲われた。梅雨の雨で水たまりの出来た校庭、そして運動部の走った足跡。校門から入ってくる通学の生徒達。徒歩の者もいれば、自転車の者もいる。友人と登校したり、１人で登校したり…そんな様々な生徒達がそれぞれ挨拶を交わして校舎の中へと入っていく。

何が懐かしいってわけじゃなく、学校生活そのものに俺は懐かしさを感じていたのかもしれない。

『……』

自分の着ている制服を見やると、ネクタイとＹシャツにＳ・Ｈの

文字。この制服は、この学校のものじゃない。ふと教室全体を見渡せば俺1人だけがクラスの中で浮いていた。当たり前、と言えば当たり前のことなのに、俺は少しだけ虚しさを覚える。

「…考えたってしかたないじゃない」

窓際の席にいた留衣が小声でそう言った。多分、クラスで俺にしか聞こえていないだろう。

「…そんなこと考えてる暇があるんだったら、今すべきことを考えたら？はたから見ててウザいんだけど」

留衣はいつも、俺の考えなんか見透かしているように言う。それが癪に障るけれど、当たっているんだから反論は出来ない。

『…今すべきことってさ、消えるか消えないか考えろってことだろ？』

窓の風景に手をそえながら、俺は青空の下に広がる校庭のグラウンドを見つめていた。皮肉なくらい青々と空が明るく光り、太陽が照っている。

『もし消えなかったとしても、俺は誰にも見えないわけだろ？誰にも見えない、誰にも聞こえない、
誰にも気付いてもらえない…』

視線を教室に向けて、その日常的な平和な空間が瞳に映っても俺という存在は、そこに存在しない。俺の話を聞く気もないのか、留衣は鞄から取り出した教科書に視線を移し、つまらなそうにそれを見ていた。　そんな留衣の様子がまるで見離されたように感じて俺

は複雑に入り交じった感情を抑えきれないまま、声を荒げて言った。
『早く消えろってことだろ！？確かにそっちにとっては早くいなくなってほしいかもしれないけど…結局、俺はそれしか…選べないじゃないか…』

留衣は俺の声になんの反応も示さなかった。それが悔しくて、右手で服の裾を握りしめていた。　本当は分かってる。結局俺は、昨日留衣が言ったようにただ同情してもらいたいだけなんだ。いつのまにか自分が死んでて、これからどうすればいいのかっていう凄く大事な選択を迫られて、その現実から逃げたいだけだってことも。
けどこうやってあがいていないと、やっていられないことも真実。無言のままの留衣の隣、窓際に背をもたれて俺は座り込んだ。苛立った感情をぶつける場所がなくて、膝を抱えてうずくまる。
留衣はこちらを一瞬だけ見たが、声をかけてはこなかった。

☆

体育館の中は風通しが悪いせいか、それとも連日続いた雨のせいか、熱気がこもっていて、一歩足を踏み入れた途端に不快感が湧いてくる。そんな室内でも懸命に体を動かすバスケ部の面々は過酷な練習メニューをこなしていた。次の大会を前にして、3年生が引退した今、どこの部も2年生が主体となって活動している。
そして女子バスケ部も新しいキャプテン・副キャプテンの下、大会優勝を目指して練習に励んでいた。
「…で？いつの練習試合に出て欲しいって？」

不機嫌な表情を露わにしてそう言う留衣は、基本練習を放棄してキャプテン（島崎　雛）を見下ろしている。副キャプテン（藤堂浅海）は後輩の練習を1人1人確認して熱心にそれぞれの癖、練習の必要な部分を指導していた。

「えっとね～、確か…土曜日の試合！」

そんな2人の会話を遠巻きに見ながら俺は体育館の2階部分からバスケ部員達を眺めていた。

「土曜？」

いかにも面倒くさそうな表情をする留衣に、小動物は特有の可愛らしい目をくりくりさせた。

「何かあるのぉ？」

「別に…」

そんな島崎を軽く流して、留衣はボールを手に取った。開いているゴールの方へボールをバウンドさせながら歩いていく。体育館シューズが床を踏む音。ふと、部員達の視線が留衣の方へと集まる。

「…？」

気が付くと、男子バスケ部の音まで止んでいる。静まりかえった体育館に外を通り過ぎていく風の音、運動部のランニングのかけ声…そんな様々な音が響いてきた。

バウンドするボールの音。弾力のある球体は空中に跳ね上がり、彼女の手によってまた床へと引き戻されていく。オレンジ色のボー

ルが垂直に落ちて、また跳ねる。
もう1度バウンドしたそれを留衣の手が捕らえた。無駄のない動きでボールを額より少し上へと持ち上げる。膝を少しだけ折り、真っ直ぐに伸ばす時の反動と、手のスナップを利用して前へと押し出す。
フリースローのラインより少し離れた所からシュートされたボールが、綺麗な弧を描いてゴールへと近づいていく。真っ直ぐに吸い込まれていくボールは、ゴールの丁度真ん中へと入っていった。リングに少しも触れず、ただ真ん中に。

「ふわぁ…！いつ見ても凄いね、さ～ちゃん」

静まり返った中で最初に声をあげたのは島崎だった。リングを抜け、床を転がるボールを拾い、藤堂が留衣にパスする。

「さすが留衣さん」
「……」

留衣は2人に答えず、パスされたボールを片手に黙々と練習をし始めた。こちらに背を向けた留衣を見て、2人は忍び笑いをもらす。

「…照れていらっしゃいますね…」
「うぷぷ。さ～ちゃん、正直じゃないんだからぁ」

留衣に注目していた部員達もだんだんと練習を再開し始め、また熱気のこもった体育館に活気が戻り始めた。部員達のかけ声が響いてくる。隅で練習し始めた留衣の上から、俺はその様子を眺めた。

「…何？」

その表情には見るな、と大きく命令形で書かれている。うざったそうにこちらを見る留衣の顔に、俺は一瞬ひるんだけれど、なんとか次の言葉を返すことには成功した。

『…いや、その…バスケ上手いんだな、と思って…』

今朝喧嘩をふっかけた相手に対してこうゆうことを言うのは少々不満だったけれど、留衣の反応は結構意外だった。

「…それはどーも」

そう言ってまた顔を背けるように別な方向を向く。どうやら癖らしい。

（…あ、また照れてる）

どうやら彼女は朝、俺が怒っていたことに対してなんの感慨もなかったようだ。なんだか嬉しいような悲しいような。謝る必要がない、という点では良いことなのだろうか？

ボール片手にジャンプシュートの練習を始めた留衣に、俺はふとため息をついた。

「…まだ、なんか用？」

今の表情、訳すなら『ため息つくな、鬱陶しい』といったところだろうか？俺はそんな留衣を見返して、視線を右手のボールに移した。

『いや、バスケしたいなぁ…って思っただけ』

なんとなく、ただなんとなくだけど。楽しげに部活に励むバスケ部員達を見ていたからかもしれない。留衣はボールと俺とを見比べてあからさまに嫌そうな顔をした。

（そこまで嫌がらなくても…）

『…ま、出来ないもんは仕方ないって言うんだろ…』

次に出る言葉を予想して、俺はため息をついた。けれどその瞬間、留衣の声が割って入る。

「…出来ないわけじゃないけど？」

俺は思わず間抜けた声をあげた。

『…はぁっ！？』

留衣はこちらに一瞥くれて、至極盛大なため息をついた。バウンドするボールに視線を移し、俺のいる場所にしか聞こえないくらいの小声で言う。

「…未だに自分が霊体だってこと忘れてるの？」

『…あ』

そういえば。そう思ったのが顔に出たのか留衣は呆れ顔1つしてボールを手に取る。

「…今日は駄目だけど」

今日くらい普通に練習させろ、と留衣の目が訴えている。俺は何度も頷く。何にも触れられない、そう思っていた。けれど、こんな

方法があったんだ…。
有頂天になっている俺を横目で見た留衣は、またため息をついた。
「ほんと、鬱陶し…」

☆

段々と慣れてきた留衣のワンルームの部屋は、1人ならまだしも2人いるとちょっと窮屈に感じる。たとえその片方が幽霊だとしても、留衣の目には人間に見えるわけだから、このジメジメした時期には暑苦しくてたまらないらしい。
テレビの前に座ると、留衣は眉をしかめた。けどそれは別に俺が部屋の中にいるから、というわけではない。
「1つ言っとくけど、人の体借りて勝手なことしないでよ」
『…それより俺、乗り移り方自体分かんないんだけど…』
私に聞くな、と罵倒が飛ぶ。けれど取り憑き方さえ分からない俺に、一体どうやって乗り移れっていうんだ。
「壁とか通り抜ける時みたいにすればいいんじゃないの？」
面倒、と顔に書いてある留衣は一緒に考えてくれるなんてことはしない。半分テレビの方に意識がいっている。夕食後のアイスを口にしながら、留衣は暑苦しそうに扇風機にあたっていた。
『か、壁とかって…』

自慢じゃないが、幽霊になってまだ2日…否、幽霊になったことを自覚してまだ2日。壁抜けなんて芸当は未だ恐ろしくてやっていない。それを言ったらまた非難の目を向けられそうなので、口にするのは控えておく。

おそるおそる目の前にある留衣の背中に手を伸ばす。けれどやっぱり恐いような、そんな感じに襲われて手を止めた。普通恐いのは乗り移られる方だとは思うんだけど…。

肩に触れるはずの指先が、空を切ったように滑り落ちる。するっと肩を通り抜けた。

留衣は気にした様子もなく、テレビに視線を向けている。

（…どうしろっていうんだよ、この状態…）

俺はもう1度手を伸ばした。期待通り指先に感触はなく、そのまま手が留衣の体の向こうへと消えていく。もしかして反対側から出てたりして。そしたらホラーだな…、とか考える俺。

『…あー！もうっ！』

考えたってしかたない。　思い切って手をさらに伸ばした。肘あたりまで留衣の体の向こうに消える。

（乗り移るったって、一体どうすりゃ……うわっ！）

心の中でそう悪態をついた瞬間、目の前が一気に真っ暗になった。パニくる俺に、いつも通りの冷静で抑揚のないあの声が聞こえる。

『…静かにしてくれない？煩いんだけど』

「えっ、…えっ？真っ暗でよく見えないんだって！」

暗闇の中でもあの呆れ返ったような、それでいて皮肉を含まれた言葉が返ってくる。

『あんたね…。目の開き方も忘れたの？』

「へ？」

目の開き方？

俺はとにかく意識を落ち着かせて、深呼吸をする。吸って、吐いてを繰り返していたら何処からか留衣の苛ついたような気配が伝わってきたので、止めた。

そしてゆっくりと瞼を上げていく。徐々に開けていく視界にテーブルと、テレビの画面が入ってくる。完全に目を開けた状態で、俺はやっと理解した。

目線が、違う。

「…え？…え？え？え？」

『騒がないでよ、アパートなんだから』

驚愕の声をあげそうになったが留衣にそれを悟られて、俺は絶句するしかなかった。ふと思いついて両手を見てみると、明らかに今までの自分の手より小さい。色も白いし、細い。どこからどう見ても留衣の手だ。

『ご感想は？』

何事もなかったかのように聞こえてくる平然とした声。俺はふと辺りを見回し、留衣の姿がないのを確認する。

「…留衣は、何処にいるわけ？」

『体はそこ、意識は頭の中』

どうりで、声が間近で聞こえるはずだ。近いどころか、頭の中から聞こえてくるのだから。　ふわ、首を振っていた扇風機の風が首筋にあたる。長い黒髪が揺れた。

「…すごい。涼しいって感覚がある…」

俺はふとさっきまで留衣が食べていたアイスに手を伸ばした。スプーンを握ると金属特有の硬質な感触が右手に伝わってきた。何気なく、アイスをすくって食べてみる。

「…あ。冷たい…」

視覚も、味覚も、聴覚も…幽霊の時とは少し違う、この感じ。なんとなく、懐かしい気がする。

『…勝手に食べないでくれない？』

「あ。ごめん」

そう言って、ふと口元をおさえた。

「…留衣の声？」

その声に、留衣の意識が呆れたようにため息をついた。

『…当たり前でしょう？これは私の体なんだから』

そう言われて、やっと完全に自覚が持てた。留衣の体に乗り移っている。今更だけど、変な感動が湧き上がってきた。

「すご…。視線も低いし、座ってる感覚もする…」
『悪かったわね』

有頂天になる俺とは逆に留衣のテンションはどんどん低くなっていった。その気配に最初は怒ってるのかと思ったけれど…どうやら違うらしい。

「…留衣、どうかした？」
『…別に』

なんだか少し疲れたような、そんな気配が伝わってくる。俺はアイスを口に運びながら首を傾げた。長い髪が揺れてなんだか首筋がくすぐったい。そして暑い。

「なんで女ってこんな暑い想いしてまで髪伸ばすんだろ…」
『さぁ？』

そっけない返事で返される。一応留衣に質問したつもりなんだけど。

「留衣だって女じゃん」
『私は特別理由があるだけ』

説明させられると予想したのか、留衣はさっさと話を切り上げようとした。その様子に俺はテレビ画面を見ながら少し意地悪くこう言ってみた。

「…それなら理由教えてもらうまでず～っと憑依したままでいようかな～」

ちょっとした嫌がらせだ。本当のことを言うと単に離れ方が分からないだけだけど。留衣は怯んだ様子もなく、淡々とそれに答える。

『…ああ、そう。それなら無理矢理追い出すけど』

自信の発言、というわけじゃなく、留衣は平然とそう言った。

「…へ？」

間抜けな声をあげた俺。頭の中から聞こえてくる留衣の、訳の分からない言葉の羅列に呆然とする。ゆっくりと留衣の声が大きくなっていく。何と言っているのかはよく分からない。

何かに弾かれたように目の前が真っ暗になった。テレビを突然消したときのよう。画面には何も映し出されない。すっと体が軽くなる。

『…え？』

目を開けてやっと視界がいつもの位置に戻っていることに気付く。一瞬ぽかん、として目の前にいる留衣を見た。また何事もなかったかのようにアイスを食べ続ける留衣に俺は恐る恐る聞いてみる。

『る、留衣？今の、何？』

留衣はテレビに視線を向けたまま、そっけなく答えた。

「瞬間的に体外へ弾き出しただけ」

だけって…。

『な、なんで留衣、そんなこと出来んの！？』

ふぅ、と息をついて留衣はこちらを向いた。面倒臭そうな表情だけど、どうやら説明してくれるらしい。

「…家が神社で、昔から巫女の真似事させられてきたから」

髪を伸ばしているのもそのせいだ、と留衣は嫌そうな顔をする。どうやら彼女自身、髪を切りたいとは思っているのだが、巫女の仕事を時々させられるので、切るに切れないらしい。

どうりで、と俺は1人納得していた。何故何処にでもいる女子高校生が幽霊が見えたり乗り移ったものを祓い落とすことが出来るのかと思いきや、そうゆう仕事を昔からしてきたからだったのか。

『今まで何人かあんたみたいなのは見てきたけど…』

最初に留衣が言っていた言葉。今になってそれが蘇ってきた。

（ってことはもしかして…）

留衣はいままでも何人か、俺と同じ境遇の幽霊を助けてやったことがあるのだろうか？神社の仕事や巫女さんの仕事なんて全くと言っていいほど分からないけれど、これだけは言える。

きっと、これまでも何人かの人が、決めたんだ。自分の行く末を。俺と同じ、消えるか否かの選択の答えを…。

☆

数学の授業ほどつまらないものはないと私は思う。教師特有の眠気を誘う声が教室に木霊していればなおさら。黒板に書かれた文字の羅列に私はため息をついた。

昨晩行った予習と全く同じ問題の解き方。公式と問題の種類、そしてコツさえ掴んでしまえば答えは一通りにしか出てこない。別解というものはあっても、辿り着くのは同じ答え。

数学は嫌いではない。けれど、もう容量を得た問題を何度も繰り返し解かされるのは好きではない。１の足し算、１の掛け算を繰り返しさせられると飽きてくるのと同じことだからだ。　だから私は数学の授業を睡眠時間と決めている。おかげでテストではある程度の点数を稼ぐことは出来るが、授業態度の減点の為、数学は未だ５を取ったことはない。

「この計算にこの公式をあてはめると……」

私のクラスの数学担当はバスケ部顧問の杉村だ。体育教師でもないのにバスケ部顧問、というのは昔取った杵柄。杉村は昔バスケ部で全国大会まで行った強豪チームのメンバーだったという話だ。ただし、全国でどこまで勝ち進んだかは定かではない。否、スタメンだったかさえも怪しいところだ。

黒板に几帳面な文字が綴られていく。眠気を誘う杉村の低音の声と、怒っても恐いと思えないあの中年太りの体型。おかげでこのクラスの大半は寝ている。

私は眠気と共に重くなる瞼を窓の方へと向けた。窓と私の机の間に座り込んで膝を抱えている「そいつ」は、なにやら考え事をしながら

黒板の文字を眺めているようだった。

原因は、昨日の夜のことらしい。また何か余計な考え事を始めたらしく、はっきり言って鬱陶しいことこの上ない。考えても仕方が

ないことに何故気付かないのか。こいつの思考回路は全く理解できない。

（…馬鹿らし）

２つしか選択するべきことはない。消えるか、否か、たったそれだけ。…そして皆、その簡単な選択に苦しむ。

分からない、と私は心の中で呟いた。何故皆そんなことに悩むのか。もう死んでいること、誰にも気付いてもらえないこと、何も触ることが出来ないこと…そんな諸々の理由が何故そんなに辛いことなのか。

肘をつい無言のまま黒板を見つめるそいつはらしくもなく眉間に皺を寄せ、まだ何か考え込んでいる。その横顔が一瞬、公園で初めてこいつを見た時のあの表情と重なった。月を見上げていた、あの時の顔。

（何も覚えてない幽霊、か）

記憶が何一つないこいつが唯一覚えていたのは、『月を見ていた』こと。朧に光る、梅雨時の空に浮かぶ月…。

通常幽霊というものは何か思い残すことがあって姿を現す、と伝えられている。それが恨みや思い残しであれ、普通ならばなんらかのきっかけを持っているはず。けれどこいつは、そんな感情なんて何１つ持っていなかった。

それは単なる馬鹿なだけなのだろうか？それとも…

『留衣、留衣っ！呼ばれてる！』

そんな声が思考に割って入ってきたので、私は一瞬だけ固まった。顔を上げると、首を傾げてこちらを見る杉村の顔が視界に入ってき

た。

「…榊？どうした、外に何かいたか？」

いつの間にか、教室中の視線が私に集まっていた。雛や藤堂までもがこちらに視線を向けている。教室が奇妙な緊張感に包まれた気がした。

「いえ、なんでも…」

「そうか？それじゃあ榊、ここの問いの答えはどうなる？」

杉村がそう言って授業を再開させると、私に向かっていたクラスメイト達の興味が反れ始めた。私はノートに書いていた基本問題の答えを読み上げ、席につくと息をついた。

『…留衣、どうかした？』

私は脳天気に首を傾げたその幽霊に一瞥くれて、教科書に視線を戻した。抗議の声が隣から聞こえてきたが、授業終了のチャイムにかき消され、よくは聞こえなかった。

☆

徐々に夏らしくなりつつある6月の夕焼けは榛の色をしていた。空に段々と薄い月の影が見え始めると、風も涼しくなり夜の気配がしてくる。車の行き来する音を間近に聞きながら俺は夕方の大通りを留衣と一緒に歩いていた。駅までの道に生徒の姿は少ない。

大通りまで出れば駅までの道は一直線。車道の隣に作られた歩道

には夕焼けの光に反射する緑の葉をつけた街路樹が立ち並んでいた。
時折車が通りかかるとその枝が風に揺れる。

『…？』

ふと俺はその向こうに奇妙なものを見つけた。少し入り組んだ十字路の片隅。

『留衣、あれ…』

足を止めてこちらを振り向く留衣に俺はそれを指し示した。十字路の片隅に置かれた花束と、事故多発の看板。そして傍らに何かの衝突で曲がったガードレール。
夕日に染まる看板とガードレールには傷がいたるところについていた。彎曲したそれらは何か物悲しそうにその場所に存在している。
けれど俺が指差したのは事故の残骸ではなく、その十字路の片隅に佇む小学生くらいの女の子の姿だった。

『透けてる…』

彼女の姿は、完全に透けていた。そう、俺と同じように。
留衣はそちらに視線を向けると、何の抑揚もなく言い放った。

「幽霊でしょう。この間、事故があったらしいから」

俺は足を進める留衣の後ろをついていきながら、視線をそちらへと向けていた。女の子が無表情に花束を見つめているのが、俺の目に入る。

『…事故…』

その一言がとても大きく、重いもののように感じた。

『…留衣』

「何？」

こちらを振り向きもしない留衣に俺は後ろから問いかけた。歩道に、1人分だけの影がのびている。

『…なんであの子はあそこにいるんだろう？』

ふと足を止めた留衣に、俺は続けた。

『普通さ、理由があってそこに残るんだよな？それじゃあの子は何を思い残してるんだろ…』

留衣はもう一度十字路の片隅に目をやり、またくるりと背を向けて駅への道を歩き出した。

『え？あ、ちょ、ちょっと、留衣っ！』

「…時々」

呟く留衣の後ろ姿は、夕焼けに染まった榛の空を見上げていた。

「死ぬのを認めるのが嫌なんじゃなくて、残した人のことが心残りで此処に残るやつもいる。あの子も、そうゆう感じじゃないの？」

ビルが夕陽を反射して光っていた。留衣の視線を追って見上げた空には、薄い月が段々とその姿を現し始めている。車の雑音、時折聞こえる帰宅途中の学生達の話し声、そんな諸々の風景やノイズが

俺の中で異様に印象に残った。

第2章　幽霊と白い月

風鈴の音が鳴る。アパートの前にある杉の木が葉擦れの音を奏で、その涼しい風が網戸を通り抜けて入り込んできた。網目状の風景の外には真っ白な月が満点の星空と共に照っている。時折聞こえる線路の踏切や、電車の通り過ぎる音が小さく響いてきた。

部屋の中に視線を戻すと、1人話し続けるテレビや机に向かって熱心にも勉強をしている留衣の姿が視界に入ってきた。鬱陶しいと1つに結んだ留衣の髪も外からの微風に揺れている。

清々しい外の空気に俺はふと満月の月を見上げた。太陽の光を反射して光るその球体は闇に包まれた夜空を飾る、星々の中の主の飾り物のようだった。煌めく星達の中で最も大きなその球体は太陽という全く別の存在とバランスを合わせるかのようにそこに存在し自分達のいるこの地球を何億年も前から見つめ続けている。

輝く星達の中でも月だけは静かで、どんなに星達が自身の光りを競い争うことがあっても、そこだけは変わることなく澄んで見える。その月光はまるで優しい視線のように地上に降り注いでいる。ずっと変わらぬ、その場所から。

ふと眼下の道路を見やるとそこには水たまりに映った2つ目の月の姿。電柱から落ちた梅雨の雫に波紋が広がり、一瞬姿がかすれた月はまたすぐその居場所に舞い戻ってくる。

（……月）

その時俺の脳裏に浮かんだのは記憶の始まりのあの朧月。霞んだ月のあの姿。ふと地面に浮かんでいた月が消えた。空を見上げると、さっきまで都心の住宅地を照らしていた月が雲の切れ端に包まれてその姿を隠している。

（あ…）

儚い光を漏らす雲の隙間。けれど月はその輪郭全てを雲の中に消してしまった。

風鈴の音がまた響いている。杉の木の揺れる音とガラスを叩く高い音色がやけに切なく反響していた。

「ちょっと」

『…え？うわっ、留衣、いつの間に』

先程まで机に向かっていたはずの留衣がいつの間にか俺の後ろに来ていた。あまりに突然だったので大声をあげた俺に留衣はいつも通りの「うるさい」という決まり文句を吐く。

「これからコンビニに行くんだけど、あんたは？」

『えっ、あ、俺も行く』

大慌てで返事を返す俺。その答えを確認した留衣は窓のカーテンを閉め、テレビを消す。蛍光灯を1つずつ消していくと、反対にカーテンの隙間からは小さな灯りが差し込んできた。玄関の明かりにそって外に出ると、やはりあの杉の木はその大きな影を盛大に揺らしていた。先を歩く留衣の背中を追いながら、俺はふと夜空を見上げる。

いつの間にか雲間から逃れた月がその姿を現し、また地上をその月光で包み込んでいく。その白い球体は地面に反射し、第2の月がまた水たまりの中に浮かんだ。

コンビニが車道を挟んだ反対側に見えてくると、俺の意識は月からコンビニへと移った。車の通りすぎる音が何度かしてから、留衣

は横断歩道を渡る。どの店よりも強い光を放つ営業２４時間のコンビニには客が2、3人しかおらず、店内を流れる宣伝の音楽以外は静かなものだった。

『そういえば留衣。何か買う物あんの？』

「別に。ただ勉強の気休めに」

商品の立ち並んだ棚を一つ一つ見つめながら、俺は留衣の後ろをついていく。別に、なんていいながらも留衣の買う物は最初から決めていたらしく、迷うことなく今日の夜食らしきものを手に取っていた。

時折聞こえてくる車道の音と、店員の「いらっしゃいませ」の言葉。ふと視線を棚から入り口の方へ向けると、留衣と同じ考えのコがいるのか、夜食を買いに来た女子高校生の姿があった。留衣とは違う灰色のスカートに、開襟シャツの制服。雑誌の棚の前で足を止めているその後ろ姿を見て、俺はふと呟く。

『…留衣。あれ、どこの学校？』

インスタントラーメンの棚を見つめていた留衣が振り返る。俺が指差している方向に視線を向ける。

「さぁ？同じような制服の学校はたくさんあるから、よくは分からないけど」

都内に高校は数多く存在する。私立、公立、都立…その中で同じような制服の学校はたくさんあるから、一つ一つを把握していない、そう留衣は言った。

「…ここの近くの学校だとしたら城東学院か、佐山の高等部か、桜

丘か、私立の常和あたりじゃないの？」
『…ふーん…』

また視線を棚に戻した留衣のカゴの中にはいつの間にかスポーツドリンクが１つ、入っていた。家でも滅多にジュース類を飲まないのに珍しいな、と俺が思った時。

「…あんた、明日どうするわけ？」
『……明日？』

間抜けた声を出した俺を呆れた表情で見返して留衣はレジへと向かう。なんのことかさっぱり理解できていない俺は、留衣が精算を終わらせて戻ってくるまで困惑しているしかなかった。

『る、留衣…明日って、なんかあったっけ…？』

留衣はコンビニのドアを押して、外に出た。横断歩道を横切りながら留衣はため息をついて呟いた。

「…バスケがしたいって言ってたのは何処の誰？」
『えっ、もしかして…』

今日は金曜。明日は土曜。確か島崎は土曜の練習試合に出て欲しいと言っていたハズ…と、いうことは。

『し、試合に出させてくれんの！？』

思わず大声で叫んでしまい、留衣の一瞥をくらった。

「点差離されたらすぐ代わってもらうけど…あんたバスケ出来るん

でしょうね？」

中途半端な返答をすれば、留衣の気が変わりかねない。俺は一応、と小声で前置きしてから言った。

『ルールは全部覚えてる』

嘘はついていない。バスケのルールは全部頭の中に入っている。ただ、それが出来るかどうかまでは、記憶にない。

「…それで何で自分の名前を覚えてないんだか…」

『…』

留衣は息をついて足早に歩き出した。足下の水たまりが跳ねて音を立てた。俺は留衣の後ろ姿を見て、ふと空を見上げる。暗闇に光る真っ白な月がやけに大きく、そして儚く見えた。

☆

『……次、どうするんだ？』

誰かがそう言った。

街路から空を見上げた俺は、ふと真っ白に輝く満月を見つめて、足を止めた。

『…そうだなぁ…。あれなんかどうかな？』

指差した先を見て、誰かが笑った気がした。

『お前、本当に月が好きだな』

その「誰か」は一緒に月を見上げて、俺の頭を軽く叩いた。

『痛っ』

『ま、お前の描く月は嫌いじゃないけどな』

『素直に上手いって言えよ。正直じゃないな』

2人で笑い合いながら、俺達は帰路に就く。
見上げた真っ白な球体は、いつもと変わらない光で地上を照らしていた。

（……月にしよう）

心の中で俺はそう呟いた。

☆

翌日の天気は快晴だった。初夏の日差しが光綾のグラウンドを照らしている。野球部やソフト部、テニス部といった屋外スポーツの部は休日も登校してきて部活に励んでいた。校庭を囲む木々からは蝉の鳴き声が木霊し、もうすぐ梅雨が明けることを暗示するかのように
気温は上昇しつつある。
体育館の2階の窓から外を眺めていた俺は、更衣室から出てきた留衣に手を振った。階段を昇り、こちらに歩いてくる留衣は「光綾」と書かれたユニホームにジャージを羽織っていた。長い髪を一つに結び、邪魔にならないようにしている。
けれど表情はやっぱり留衣。面倒くさい、というのが顔に出ている。

『相手校は？』
「今到着したらしいけど」

慌ただしくなる部員達を横目で見て、留衣はふとこちらに言った。

「体貸してやるんだから失敗しないでよ」
『努力します…』

後が恐いから。ふと1階の方に視線をやると、ユニホームに着替え終わった生徒達が顧問の先生の所に集まっていた。留衣は俺に目配せをして、目を瞑る。1つに結んでいた長い黒髪が風に揺れた。

「さ～ちゃ～ん！」

留衣を呼ぶ島崎達の声と、熱風に揺れる体育館近くの木々の葉擦れが、やけに耳につく。足先から床に足をつけている感触、手の動く感覚が蘇ってくる。『留衣』を動かす意志が、俺に委ねられる。指先に2階の手すりの感触。何度か右手を動かしてみて、俺はふぅ、と安堵した。1階に目をやると、下でぴょんぴょん跳ね回っている島崎キャプテンの姿が見えた。

「さ～ちゃん、さ～ちゃん。先生が呼んでるよぅ！」

「今行く」

そう答えると俺は1階への階段を駆け下りながら、意識の奥底で傍観している留衣に話しかける。

「もし点差離されたら、やっぱ強制的に…」

『体外に弾き出すから覚悟しといて』

なんの抑揚もなくそう言い切った留衣に俺は冷や汗をかく。階段の最後の段に足をかけると、相手校の生徒達が館内に入ってきているのが見えた。黒を主としたジャージを着ている顧問らしき人物と、ぞろぞろと後ろからついてくるバスケ部員達。所々にマネージャーらしき生徒もいる。

俺は1階の床に片足をつけた瞬間、そこから動けなくなった。

『…？』

頭の奥から響いてくる留衣の怪訝そうな気配も、首をかしげて駆け寄ってくる島崎や藤堂の姿も、俺の意識の中には入ってこなかった。

「――――！」

相手校の女子バスケ部員達の数十名が、学校指定のジャージを着ていた。青を基調としたそのジャージの胸元にはそれぞれの名前が刺繍してあり、右肩の袖には白い文字で学校名が記してあった。

「さーちゃん？どうかした？」

「具合でも悪いんですか？」

寄ってきた2人の不安そうな表情を見て、俺はやっと我に返った。

「…な、なんでもない…。それより、あの学校は？」

留衣のふりをすることも忘れて、俺は素に戻って2人に尋ねた。顔を見合わせた島崎と藤堂は相手校を見て、振り返る。藤堂が答えてくれた。

「桜丘高等学校、都内ベスト4の強豪ですよ」

彼等のジャージには、Ｓａｋｕｒａｏｋａ　－　Ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ　…つまり『Ｓ・Ｈ』としっかり表記されていた。

☆

無常にも俺の混乱した思考回路を整理させる時間はなく、試合はすぐに始まった。審判の笛と共にボールが宙を舞う。ゆっくりと天井へ放たれたボールが降下し始めた瞬間、２つの手がそれを弾いた。

ボールを先に取ったのは桜丘。光綾の選手の数人が走り出す。俺はボールに視線を向けてはいたものの、やはり先程の『桜丘』の文

字が頭を離れなかった。集中できないまま、試合の流れを見つめているしかできない。

（……桜丘？）

桜丘高校のマネージャーらしき女子生徒達の中に、制服を着ている者も数人いた。その開襟シャツの胸ポケットに書かれた、『S・H』の文字。俺の来ていた制服と全く同じ校章。俺の目は桜丘の方にしか向いていなかった。

「留衣さん！」

ボールが跳ねるあの特有の音と共に、目の前にオレンジ色の球体が跳んできた。慌ててそれを受け取った俺の視界に、マークされている島崎と藤堂の姿が映った。どうやら桜丘はチームの主戦力であるこの2人の動きを止めて、攻めるつもりらしい。

光綾でフリーになっているのは俺だけ。他の選手達も動ける状態じゃない。ここまできて、俺はやっと相手は都内のベスト4だったことを思い出した。早く動かないと、相手が集まってくる。走り出した俺に、まわりのディフェンダー達が追いかけてくる。けれどやはり、島崎達のマークは外れない。ボールの跳ねる音がやけに大きく木霊する。

相手の選手達に阻まれ、俺はいつのまにか身動きが取れなくなっていた。首筋を汗が伝う。混乱する思考回路でこの状態から抜け出す方法を探すけれど、頭で考えているうちに動きが鈍くなった。

「！」

ゴムボールが床に叩きつけられるあの特有の音。そして同時に手の中の球体の感触が消えた。桜丘のベンチが沸く。光綾のゴールへ

と走り出す選手達。バスケシューズで床を走るいくつもの音が反対方向へと駆けだしていった。その様子に立ちすくんでしまい、俺は点差がつけられるのをただ呆然と見ているしかなかった。

『…何してるの』

歓声が上がる桜丘ベンチ。声を掛け合う光綾の選手達。そんな中で留衣の声が頭の中に響いた。頭が混乱していたから、留衣が怒っていたのか、呆れていたのか判断できなかった。

『動揺してどうなるわけ？』

俺の思考はいつも留衣に見透かされている。悩んでいる時も、今みたいに混乱している時も。何も言わなくても留衣は全部見透かしたかのように冷たく言い放つ。

『考えたって仕方ないでしょう？』

分かってる。留衣の言っていることが正しいことも、考えたって状況が変わるわけじゃないことも。けど俺は留衣のように冷静じゃないから、ただ動揺するしかないんだ。

立ちすくんだまま動けなくなっていた俺に、留衣の落ち着いた声が聞こえてきた。

『あんたは今、榊　留衣なんでしょう？名無しの記憶喪失の幽霊じゃない』

「けど…」

小声の呟きは試合再開の笛の音の中に消えた。

『考えることなんて後からいくらでも出来るでしょう？』

選手達の足音、歓声、声援、審判の笛、体育館の中に木霊するもの全てが、どこか遠くから聞こえてくるかのように小さく聞こえた。頭の中で、留衣のため息をつくような気配がした。動くことのできない俺の中に、留衣の声が響いてくる。

『何のために体貸したりしてたか分かるの？』

「――え？」

誰に発したか分からないその呟きは、きっと誰にも聞こえなかったと思う。

『あんた1人で考え込んでまともな答えが出るなんて期待してない。だから考えるなって言ったんだけど？』

留衣の呆れ声が体育館内の雑音を全て消し去った。

『それに……』

誰の声援よりもその声は大きく響いた。

『あんたは今1人じゃないでしょう？』

視界に入った電光掲示板の文字は2対0。島崎達の奮闘で未だ点差は開いていないが、時間が刻々と減っていくなかでこの2点は大きい。桜丘のゴール前で奪われたボールが今度は光綾側へと走り出してくる。突っ立っていた俺はもちろんノーマークで、相手側の注意も薄い。ボールを弾く音と共に相手が足を止めた。桜丘の選手が振り返るのと同時に俺はもう一度桜丘のゴールに向かって駆けだし

た。
ボールを奪われた選手達は瞬時にそれを理解して集まってくる。
ボールの硬質な感触が右手から伝わってくる。どんどん近づいてくる敵に俺はそれを左手に持ち替え、周りを見つめた。攻めにまわっている島崎のマークは外れない。かと言って守りに精一杯の藤堂に回すわけにもいかない。

（……どうする？）

留衣に聞いたわけじゃない。自分自身に問いかける。けれど体は意識が答えを出すより先に動いていた。あの時、始めて見た留衣のシュートが脳裏をかすめる。
ここで決めれば、逆転出来る。相手のプレッシャーになるのは確かだ。ボールを強くバウンドさせるとそれは床で跳ね返り、両手に収まった。

ただこのボールをあのリングの中に通すことだけを考えて

ボールを持つ手を額の上へともっていく。腕の力を抜いて、膝を曲げて、それを伸ばすのと同時に手首のスナップでボールを空中に押し出す。
スローモーションのように弧を描くオレンジ色のボール。静かになる場内。桜丘の選手も、光綾の選手達も、そのボールの行く末が決まるまで動けなかった。頭の中で巡っていたややこしい複雑な考えも、今はいらない余計な思考も、この時全てを忘れて、俺は視線をボールへと向けていた。
弧を描いたボールは、リングの真ん中へ糸に引かれるかのように落ちていく。リングに入る音がした瞬間、大きな歓声が光綾側のベンチから上がった。
電光掲示板の光綾の点数が0から3にかわり　――――　逆転し

た瞬間だった。

☆

体育館の2階の窓からは夕方の少し涼しくなった風が入ってきた。過ごしやすい気温になりつつあるようだ。着替えに行った留衣を待つ間、俺は2階からバラバラと帰っていく桜丘のバスケ部員達を眺めていた。

試合はあの後も続いたけれど、結局あのまま点差が動かず光綾の勝利。圧勝、というところまではいかなかったけれど、都内ベスト4を相手に勝利できたことは光綾にとってかなりの収穫だ。校門へと歩いていく桜丘の一団は少し落胆したような表情を浮かべていた。無理もない光綾はまだ無名校なのだから。

『あ、留衣』

階段を上がってくる留衣の姿が視界に入って俺はそう言った。今日のことは礼を言った方がいいかな、と少し考えてみたりする。

けど、留衣は心なしか機嫌が良いようには見えなかった。

『…どうした？』

「…バスケ部の勧誘」

疲れた、と書かれた顔で留衣は1階を指差した。俺が指先を追って更衣室の方を向くといつもより更に笑顔の島崎が超高速で手を振っているのが見える。

「さ～ちゃぁんっ！考えといてねぇ！」

その隣では藤堂が苦笑していた。留衣はその様子にため息をつく。

『…なんか言った？島崎に』

「しつこく勧誘してくるから、考えとくって答えたらああゆう感じに」

だからいつもより更に熱烈な部活勧誘を受けているわけだ。島崎に曖昧な言葉は通用しないのだろうに。帰っていく島崎と藤堂を見送って、留衣はこちらに視線を向けた。

「…で？あんたは何か思いだしたわけ？」

『それが、何にも…』

試合後、バスケ部員達を眺めてはいたけれど、知っている顔は一つもなかった。顧問の顔も覚えていない。夏の夕焼けに染まってきた空が、やけに虚しく感じた。蝉の鳴き声が体育館の中にまで入ってくる。怪訝そうな表情をした留衣は、こちらを向いて言った。

「で？知りたいんなら調べるけど？」

『…へ？』

振り返った俺に、留衣は呆れ顔をしてみせる。窓の側まで寄ってきた彼女はそこから吹いてくる風に髪を揺らしながら外の風景を見つめた。

「あんたが知りたいんなら調べてみるけど。まぁ、知りたくないなら別に…」

『知りたい！』

思わず大声で叫んでしまって、留衣に煩いと怒られた。一息ついてから留衣は口を開く。

「…それじゃ、桜丘の生徒ってことで調べてみる」

1階に戻ろうとし始めた留衣の後ろ姿を見て、俺は改めてあの時の留衣の言葉を思い出した。

『あんたは今1人じゃないでしょう？』

気付いてなかったんだ、そう言われるまで。

『留衣、あのさ…』

これは一つの決心だった。言ってしまえば、取り消せなくなる。けれど、けじめをつけておかないと、ずっとこのままになってしまう気がする。

『昔のことが分かったら…決めるよ』

この時、留衣は驚いた表情も何も見せなかった。ただ、窓の外を見つめたまま、

「…そう」

と、言っただけだった。

第3章　月下、辿る足跡

テストが間近に迫ってくる時期になった。夏休み前の中間テストは生徒達のとって大きな山場である。留衣も例外ではない。

『…暇』

「うるさい」

さっきからこの言葉のやり取りしかしていない気がする。テスト前、ということでいつも以上に勉強している留衣は話し相手もしてくれないのだ。暇だ暇だと呟くたびに留衣の一瞥を受ける。

この体だとすることは限定されてしまう。家にいて出来ることと言えば、部屋の中をウロウロすることか、留衣にテレビをつけてもらってそれを見ることか、ＣＤを聴くことくらいだ。

けれど、俺と留衣の好みは１８０度違うらしい。何か音楽が聴きたい、といっても留衣の部屋にあるのはヒーリングかクラシックだ。そんなの聴いてても眠くなるだけなのに。

テレビにもＣＤにも飽きたら留衣と話をする。最近そうゆう生活が板についてきてしまったから、留衣がテスト勉強を始めてしまうと暇で暇で仕方ない。

『…暇なんだって』

「テスト勉強中。見て分からないの？」

そりゃあ見れば分かるけど…。俺は口をとがらせた。暇なもんは暇なんだから仕方がない。

『そんなにテスト、テストっていうなら俺が他の奴の答え見て教え

るからさ』

ちょっとした冗談のつもりでそう言うと、留衣はふと動かしていた右手を止めた。息をついて、こちらを振り向く。その顔は明らかに呆れたような、そんな表情だった。

「…いい考え、と言いたいところだけど」

『へ？』

シャーペンを片手で回しながら留衣は言った。嫌味もなくさらりと。

「私以上に頭いい人いないから、あのクラス」

そう告げるとまた俺に背を向けて勉強し始めた。あまりにもすっぱり言われたので、俺はただ口をぱくぱくするのみ。

『それじゃあもしかして順位なんてのは…1位、とか？』

ふとノートから顔を上げた留衣は何か考えるようにして口を開いた。

「…それはまだ取ったことがないはずだけど」

『ま、まだって…』

これから取るつもりなんですかと突っ込みを入れたくなったけれど、答えが恐いので止めておいた。シャーペンが机を叩く単調な音がまた響いてくる。俺はつまらなくなってまた窓から外の風景を見つめた。

「雨…か」

梅雨が逆戻りしたかのように激しく降り続ける大雨。雨粒が地面に叩きつけられるのを見ながら、俺はふと空を見上げた。

もう夕刻だというのに暗雲の空には、榛色の雲さえ望めなかった。

☆

中間テストが開始されると、雨音と共に机をシャーペンで叩くいくつもの音が響いた。教室の生徒達が机に向かっている風景。1人だけ窓際で立っていた俺はものすごく違和感を感じていた。これならカンニングし放題だな、なんてことを考えながら留衣の答案を覗き込む。

（…うっわぁぁぁ、留衣の答案、真っ黒…）

真っ黒、というのはこの場合、全問解いているということ。穴が一つもないほど、しっかりと書かれている。しかも現代文ならまだしも数学で。

留衣の周りの生徒達の答案も除いてみると、数日前の留衣の宣言通り、留衣より答えの書けている生徒は全くと言っていい程いなかった。留衣の次くらいに書けている人物といえば、藤堂だろうか？数カ所穴はあるものの、全問解き終えた後、ゆっくりと残りの問題を解き始めた。全く分からないというわけではないらしい。肩まで伸びた髪を耳にかけ、答案を見つめる表情はバスケをしている時と同じ真剣な表情をしていた。

留衣の後ろの島崎に視線を向けると、正反対にこちらは真っ白。まぁ、なんとなく予想はしてたけど。

頭を抱えてうんうん唸り続ける島崎。答えを思い出したときの表情はまるで花が咲いたようだ。さすが小動物。

（けど、留衣でも1位取ったことはないんだよな…）

上には上、というやつだろうか？けれどこのクラスにいないことは確かだ。だって半数以上目が虚ろになってるし。窓の外に視線を向けてため息をついている奴もいる。中には諦めて寝ている奴もいた。

見回りに来た先生がふと時間を見つめる。終了の鐘が鳴る頃には留衣はすっかり答案を真っ黒にして、寝ていた。

☆

「さ～ちゃん、さ～ちゃん！」

答案を集められている間に、さっきまで唸っていた島崎が留衣の肩をつついてきた。振り返る留衣に、小動物は笑顔で言った。

「ね、これからあさっちと図書館で勉強するんだけど、さ～ちゃんもどう？」

礼を終えると、留衣はペンケースにシャーペンを片づけながら呟いた。

「図書館、ね…」

「ご一緒にどうですか？留衣さん」

帰る準備を終えて近づいてきた藤堂の微笑みを受けて、留衣は一瞬俺の顔を見た。

『…？』

けれど留衣はすぐ藤堂達を振り返り、そして言った。

「まぁ、別にいいけど…」

ぱぁ、と島崎の笑顔が全開になる。やった！と大声で叫んで教室中の視線が集まっても、留衣に煩いと怒られ一瞥されても、てへへ、と笑って済ませるこの性格は並じゃない。

「私ね～、分かんない所い～っぱいあったからね、さ～ちゃんに教えてもらおうと思ってたの」

その声に留衣の表情が固まる。隣にいた藤堂は苦笑するのみだ。どうやら島崎は殆どと言っていいほど理解していないらしい。

『る、留衣…明日のテスト教科は？』

そう聞く俺に留衣は視線で島崎の手元を示した。島崎の手の中にあったのは、『英語』の教科書。どうやら島崎はこれの試験範囲を全て教えろ、と言っているらしい。

留衣が固まった意味が、分かった気がした。

「そういえば、もうすぐ夏休みだね～」

階段を足早に駆け下りていく島崎が振り返ってそう言った。その顔は喜びに満ちた表情をしている。餌を貰ったハムスターのようだ。

梅雨の湿った空気のせいで結露している校舎の床を歩きながら留衣はうざったそうに小動物の襟首を掴む。後ろ向きに歩いていた島崎が他の生徒とぶつかりそうになったからだ。

「…英語と日本史が終わればね」

「うー、そうやって現実をつきつけないでよ」

はいはい、と島崎に前を向かせて留衣は歩き出す。藤堂はその横で苦笑しながら玄関で靴を履き替え始めた。

「夏休みが終われば部活ですね、部長」

「うんっ！楽しみ～」

外靴に履き替えて外に出ると、暗雲の浮かぶ灰色の空が広がっていた。どうやら雨は止んだらしい。

「そうだ！さ～ちゃん、バスケ部入るかどうか終業式までに考えといてねっ！」

終業式まで？留衣も俺も首を傾げると、横にいた藤堂が微笑んで言った。

「夏休みになったら部活三昧になりますから。是非夏休み前に入って頂けると嬉しいです」

緩い風に電柱から雨水が落ちてきた。パタ、と地面を打った雨水がどんどん水たまりをつくってきていた。

「夏休みになったら何処に行こうかな～」

留衣に現実逃避を指摘された島崎がまたテストのことを忘れて夏休みの話題を出している。そんな島崎に藤堂は苦笑しながらもこう言った。

「雛さんは今年はどこへ？」

ロリコン悩殺であろう童顔の笑顔を浮かべて雛は藤堂を見返した。

「今年はロンドン～！」

あまりにもきっぱりと言われたその言葉に俺は驚愕していた。

『ろ、ロンドンっ！？』

そう叫んだ俺は留衣に小声で煩い、と叱られた。それでも口をぱくぱくさせて島崎を指差す俺に留衣はため息をつく。

「…あれでも社長令嬢」

『えぇっ！？』

俺はもう留衣に怒られるのも構わずに大声で叫んでしまった。どうせ誰にも聞こえてはいないんだけれど。

こちらの様子に気付きもしない島崎と藤堂は夏休みの計画に盛り上がっている。

「…そういえば、留衣さんはお家に帰られるんですか？」

急に話題を振られて、留衣は視線を島崎達の方に向けた。

「お盆前には帰ってこいって言われてる」

留衣は榊神社の一人娘だと聞いたことがある。家と学校が遠い為、今のアパートに越してきたそうだ。けれど、普通高校生が1人暮らしなんて親は心配じゃないのだろうか？

そういえば、留衣の所で生活し始めて2週間。まだ留衣のことは謎だらけで、知らないことがたくさんある。

「まぁ、お盆過ぎたらすぐアパートの方に帰るけど」

ビル街の間を歩きながら、3人は少し入り組んだ路地へと入っていく。島崎曰く、近道らしい。藤堂も留衣も反論しないところを見ると、迷う心配はなさそうだ。

「それじゃあさ、お盆前に3人で海水浴行こうよ、海水浴」

先を歩いていた島崎が兎のごとく飛び跳ねてきた。留衣と藤堂の腕を引っ張ってキラキラした視線を向ける。それに対し藤堂は微笑みを浮かべ、

「いいですね」

と返し、留衣は面倒臭いといった表情で

「はぁ？」

と言った。

「海までウチの車で送っていくから！ね、行こうよ！」

びったり腕にくっついた島崎を見て、留衣はとうとうため息をついた。頭を押さえて、こう言う。

「…行けばいいんでしょ」

「やったー！！」

ピョンピョン跳ね回る島崎と留衣の様子を苦笑して見つめている藤堂。そんな3人の様子を遠巻きに見ていた俺は進行方向に見えてきた図書館らしき建物に視線を移した。

国道の隣に位置する白を基調とした建物。結構な広さのある駐車場の奥に見えてきた目的地に、島崎が一番に足を踏み入れた。自動ドアが両側に開くと、図書館独特の静けさが体を包んだ。もちろんこの場所に来たこともない俺は周りに並べられた本棚の多さに驚いて足を止めた。最後に歩いてきた留衣が振り向いて首を傾げる。

「…何やってるの」

『えっ、あ、何でも…』

留衣は俺の見つめていた本棚に視線を向け、また首を傾げると俺をおいて先に歩いていった。

『…』

おいていかれてはいけないと留衣の後を追おうとした俺は、もう一度その本棚を見て、そして走り出した。

☆

1階の南側の窓に面した所に机と椅子がいくつか並べられ、留衣達と同じ制服を着た生徒達が数人、テスト勉強に励んでいた。開いている椅子を見つけると留衣が窓際の奥に座り、隣に島崎が腰を下ろした。そして留衣の反対側に藤堂が座る。俺はもちろん立ったまま。

「さ～ちゃん、ここから教えて」

ご機嫌の島崎は満面の笑みを浮かべてリーディングの教科書を取り出す。指差された基本中の基本の構文に留衣は頭を押さえてため息をついた。なにか言いた気な視線を藤堂に送ると彼女は微笑んで告げた。

「ついこの間まで練習試合で忙しかったものですから」

「？」

2人の目線での会話に入れない小動物がリスの如く首を傾げた。留衣はまたため息をついて、島崎を見やる。

「…雛。この文章の訳は？」

「わかんない」

「…。この単語の意味は？」

「わかんな～い」

「……文章の初めは？」

「述語っ」

どうやら国語と英語の違いからして分かっていない島崎に留衣は軽蔑の視線を投げかける。そんな2人の反対側で対岸の火事を決め込んだ藤堂はノートに向かって熱心に文法を書き込んでいる。

留衣と島崎の格闘を眺めていた俺はふと先程足を止めた本棚の所

を見つめていた。何気なく足を止めたけれど、あの棚に置いてあったあの本って…。すっかり意識がそっちの方に行っていた俺を連れ戻したのは、急に顔を上げた藤堂の声だった。

「そういえば部長。夏休みの部活予定表を提出して欲しいって先生が言ってましたよ」

「……あっ、忘れてたー！」

煩いと留衣の目が訴えているのにも構わず、島崎はそう叫んで周囲の視線をくらった。けど本人は気付いているのかいないのか。そんな島崎部長に藤堂は一枚のメモを差し出す。きっちりとした字で書かれた日時と時間帯、練習メニュー…。

「一応、仮の予定表は立ててておきました」

「わぁ！ありがと、あさっち！」

呆れ顔の留衣の隣で島崎が感謝の視線を藤堂に向けている。俺も何気なくそれを覗き込むと、そこには練習メニューの他にも各高校との練習試合の日程が書き記されていた。

ふと、そのメモを見た留衣が顔を上げる。

「…藤堂。１つ聞きたいことがあるんだけど」

留衣の発言に藤堂が首を傾げる。俺もなんとなく藤堂の横に来て、留衣の言葉を待った。

「…桜丘の場所、教えてほしいんだけど」

『！』

メモに目を通していた島崎も顔を上げる。

「桜丘って、この間試合したとこ？」
「そう」
頷く留衣。けれど突然の発言に俺はただ留衣の顔を見つめているしかなかった。確かに調べてみるとは言っていたけど、こんなに早くだとは思ってもみなかった。
顔を見合わせた島崎と藤堂。まだ心の準備さえ出来ていない俺に留衣は一瞬だけ視線を向けて、２人の反応を伺う。
先に口を開いたのは藤堂だった。
「…桜丘高校は確か、最寄りの駅の裏から真っ直ぐにいった所だったと思いますけど」
「最寄りの駅はたしか～、泉西駅だったよね」
駅の名前を聞いて、留衣は俺に確認するかのようにこちらを見た。けれど、全く覚えがない。首を横に振る俺に留衣は顔をしかめた。
「けど、さ～ちゃん、何しに行くの？」
「ちょっと、ね……」
曖昧な留衣のその答えには明らかに桜丘に行くという意志が混じっているように思えた。俺は頭を抱える。透けている足下が急に覚束無くなったような感覚がした。留衣はきっと、心の準備が出来ていないとか言い訳する暇さえ与えてくれないだろう。
妙に緊張するような、恐いような、そんな複雑な気持ちを抱えて、俺は窓から空を見上げた。夕焼けに染まった空に浮かぶ自由奔放な白い雲がやけに恨めしく思えた。

☆

真っ赤な空の下だった。
誰かの呼ぶ声が鼓膜を破るくらい大きく響いた。

全身が熱くなって、溶けていく……そんな気分だった。虚ろな目が見上げた夕焼けの空はいつのまにか榛から赤く変わって、熱砂の砂漠のように熱かった。
熱すぎて、痛かった。

（……痛み？）

体を揺する誰かの手。けれど徐々に視界は狭まり、喧噪も遠く、意識もその働きを鈍らせ始める。まるで眠る時のような、そんな感じだった。

「…おいっ！返事しろよ…答えてくれよ、圭っ！」

やけに煩い声。眠りにつこうとしている自分を無理矢理叩き起こそうとしている『誰か』。……静かにして欲しい。もう少しで寝れるのに……。

視界には何故かそいつの顔が入ってこなかった。俺は狭まってくる視界の中で、最後に空を見上げていた。

真紅に染まった空の、透明な月が見えた。

第４章　月の記憶

電車の振動に揺られながら、留衣は外の風景に視線を向けたままだった。俺はこれで今日数十回目の台詞を口にした。

『留衣、別に今日じゃなくても……』

流れていく住宅街やビル街の風景から目を離さず、留衣は抑揚もなく同じ答えを繰り返した。

「……テスト期間中の方が生徒が少ないし、何かと都合がいいでしょう？」

つまり目立つのが嫌だ、と。俺はなんとか留衣を帰らせる上手い言い訳を探したが、すべて玉砕する。窓ガラスの枠に頬杖をつく留衣がふとこちらに視線を戻して言った。

「知りたくないんなら別にいいけど？」

『えっ、いや、知りたくないわけじゃないけど…』

けど、とそこまで言って、次の言葉が出てこない。結局恐いだけなのかもしれない。自分の過去、死んだ時のことを思い出すのが。

無情にも電車は泉西駅のホームへと滑り込み、幾人もの乗客をはき出してまた走り出した。帰宅途中の学生やサラリーマン達の間を抜け出して、東口側の自動改札口を通ると駅の外の通りが目に入る。

そんなに人通りの多くない道を歩く数人の学生。駅に向かってくる学生達の制服は、どう見てもこの間練習試合にきた桜丘高等学校の制服だった。下校者達の中に制服の男子を見つけて、留衣は小声

で言った。

「どうやら当たりみたいだけど？」

『……あ』

俺たちと擦れ違った男子生徒の制服は、俺の来ている制服と全く同じものだった。１つ違うことといえば、長袖であるか半袖であるかの違いだけ。

信じられないわけではなかった。桜丘であるという予感はもう殆ど確信の域に達していた。それでもこんなに動揺しているのは、自分の死という現実を目の前に突きつけられるのが恐いから。

足を止めた俺を待っていた留衣が目的地を見つけ、歩き出した。通りの広い道に隣接していた桜丘高校の建物。そのフェンスの前で留衣はグラウンドの中を眺めていた。

一歩、また一歩と忘れていた記憶の前へと足を踏み出した俺は、透けている両足が震えているような、そんな気がした。

視線をグラウンドの中に向けて、留衣は中を眺めていた。フェンスの周りに並んだ木々が視界を邪魔するけれど、その向こうに見えたのは生徒達の喧噪が消えた学校の姿だった。向こうに見える５階建ての校舎と体育館は光綾よりは新しいように見える。

「……何か思い出したことは？」

俺はまた首を横に振った。そんな俺を見た留衣は、フェンス沿いにまた歩き出す。

『え、あ、留衣？』

「校門前に行ってみる」

行ってみる、というよりこれは強制だ。嫌だとは多分言わせても

らえない。通りに隣接したフェンスの終わりに曲がり角が見えてきた。どうやらこの道が校門の方へ続くらしい。先を歩く留衣の背を追って俺は近づいてくる校舎を見上げた。校門まで、花の散った桜の木が続いていた。

留衣は校門の隣まで来て、校舎を見つめた。

『留衣、まさか、中に入ったりなんて……しないよな？』

こちらに視線を向けず、留衣は答えた。

「入れるなら入ってみたいけど……正面から入っていっても、部外者は通してもらえないでしょう？」

安堵で胸をなで下ろす俺に、留衣は一言付け加えた。

「だから別な方法を考えてる」

固まる俺を無視して、留衣は上を見上げた。風にざわめく桜の木々に視点を定めた留衣はしばらくそこを見つめて、立ちすくむ。

『……？留衣、何して……』

留衣の視線を追って桜の木を見上げた俺も、そこで足が止まった。葉擦れの音を奏でる一番太い枝の上から何かが落下した。

「うわっ！？」

視界を両断するように真下に落ちたその物体が、フェンスの向こう側に落ちて声をあげる。痛みに転げ回る男子生徒がフェンスの網の向こうに見える。同情の余地もなく男子生徒を見下ろしていると

彼は痛みを堪えるようにフェンスに手をかけ立ち上がった。土を払いながらこちらに視線を向ける。

「……大丈夫ですか」

留衣は心配のカケラもない声で言った。呆れているのがよく分かる。相手は金網に両手をついて笑った。

「いや、校門前に綺麗な女の子がいたもんだからつい…」

軟派な口説き文句を無表情で流す留衣はもっと不機嫌な面持ちで男子生徒を一瞥する。

「結構クールだね、君」

相手にされなかったことに項垂れるその生徒は、どうみても優等生とは言い難い規定を守らない服装で、栗毛色の髪を一つに纏めていた。ため息1つつくと、男子生徒は顔を上げて笑ってみせる。コロコロ表情が変わるところは島崎に勝るとも劣らない。

「……で？校内に入りたいんだろ？」

笑顔を浮かべて言われたその爆弾発言に留衣は顔をしかめ、俺は例によって例のごとく叫んだ。

『はぁ！？』

「……どうゆうこと？」

「そりゃ、女の子が困ってたら助けてあげるのが常識だろ？」

留衣は一瞬こちらに視線を向けて、そしてもう一度この男子生徒

に視線を向けた。息をついて、相手の目を見る。

「亡くなった生徒の知り合い、なんだけど……」

これは決して嘘ではない。生きている頃の知り合いだなんて一言もいっていないからだ。男子生徒は一瞬顔をしかめてまた先程の笑顔に戻った。

「……あー、あいつか……」

「……中に入れてもらえるんでしょう？」

男子生徒は先程までの軟派な笑みを浮かべて頷く。俺は一瞬こいつの笑顔に妙な気分を覚えた。何かがひっかかるような、そんな気分だった。

「もちろん。あ、俺、時雨。…よろしく」

☆

桜丘の校内はテスト期間中の為か生徒の姿も少なく、私はあまり人目につくことなく校内に入ることが出来た。廊下の窓から見下げた校庭は夕暮れの色に染まり、帰路につく生徒達の姿がいくつか行き来している。

「…で、君、光綾の何年生？」

先程からしつこい位に審問を繰り返す時雨に私は視線も向けずに答えた。

「…2年」

校内に入れて貰った恩もある。答えないわけにはいかない。私は面倒くさいと何度も溜息をつきながら脳天気な時雨の声を聞き流す。

「俺と同じじゃん。ラッキー」

「ああ、そう」

私はそう受け流して、少し後ろを歩くあいつに視線を向けた。教室の一つ一つを覗き込んでは首を傾げている所を見ると、思い当たる所があるのかもしれない。

「んじゃさ、あいつとはどんな関係？彼女とか？」

「知り合いってさっき言ったはずだけど？」

私が軽蔑の視線を向けると時雨は笑ってそれを切り返した。

「だよな～。だってあいつ女の子とかって全然興味ない奴だったし…っと、こっちこっち」

通り過ぎようとしていた私に時雨が特別教室を指差した。手招きする時雨に近寄り、中を覗き込むとそこからは、普通の教室とは少し違う空気がしていた。入り口の上を見上げると、そこには『美術室』と書かれていた。

「あいつ美術部員でさ…まぁ、あんま部活には行ってなかったみたいだったけど」

空気が違うと感じたのは油絵のあの特殊な臭いが少し残っていた

せいだろうか。私は光綾より少し広めの美術室に足を踏み入れると、なにかを探している時雨に後ろから問いかけた。

「あなたも知り合い？」

「…まぁ、そんなとこ」

窓の閉め切られた美術室は夕暮れの色に染まり、いくつかのカンバスが教卓の上に置いてあった。私はふとあの幽霊の気配がないことに気付いて、振り返る。

（…？さっきまで後ろにいたはず…）

「…あ、あった。これこれ」

棚の上に重なっていたカンバスの中から時雨は一つの油絵を取り出してきた。軽く埃を払うと、それを私に見せてくる。苦笑いのような、笑顔になりきれていない表情を浮かべて、時雨は言った。

「結構、賞とか取ってたんだけどさ。…これが最後の絵」

いつの間にか、足がこっちに向いていた。あの階段を登れば、ここに着くことが心の何処かで分かっていたのかもしれない。

夕焼けに染まる空の、薄く色を取り戻しつつある月。俺はそれを見上げて足を止めた。風の流れも、葉擦れの音も、何処からか聞こえる車の音も、耳に馴染んでいる。安全用のフェンスの編み目から見下げた校庭も、向こうに見える公園も、ビル街も、覚えてる。

フェンスの向こう、屋上の端から見下げたコンクリートの色も。

『ずっと月を見ていた気がする』

紺色の水面に浮かぶ蓮の花。夜だというのに開いたままの花弁、隣に並んだ緑の葉。弧を描くように水が揺れる。雲間から差した月光が水面に反射し、水中にも同じ月が浮かんでいる。
写真のように一瞬間の風景を映し出したかのような絵。白蓮と月が同じ光りに飾られて光っている。暗い、周りの風景と対照的で人目を惹く。
私はふとそのカンバスを裏返す。そこには薄く、こう描いてあった。

【蓮と月　2年7組　古栖　圭】

☆

特に生きてる理由もなかった。けど死ぬ理由もあるわけじゃなかった。行動にいちいち理由をつけるような性格ではないけど、『何故生きてるのか』と聞かれたらそう答えようと決めていた。死にそうになるような出来事があれば、死ねばいいだけ。運命なんて信じるタチではないけど、そうゆう運命だったと理由付けして死ぬことが出来る。
友人なんてものは当然、いなかった。必要以上の干渉はするのもされるのも好きじゃなかったし、裏でどう思っているかも分からない奴と馴れ合うのは嫌だった。こんな性格のおかげでクラスメイトはあんまり寄りつかなかったし、簡単に1人になることが出来た。
今の生活に、満足はしていなかった。けれど不満足でもなかった。いつの間にか、俺は授業をサボっては屋上で1人で絵を描くようになっていった。
そんな日々を少しだけ変えたのは、梅雨入りの少し前、確か、全

校集会の日だったと思う。　５月末の、澄んだ空を見上げて俺は右手を動かしていた。五月病のせいか、もうすぐ梅雨が来るせいか、鬱々とした気分が晴れない。青空とは対照的に沈んでいく思考を忘れようと俺はスケッチブックに向かっていた。全校集会で生徒が皆、体育館の方に集まっている為、校舎はいつもの喧噪を失って清々しい程静かだ。

俺は一息つくとあまり進まないスケッチブックの中の青空をグシャグシャと鉛筆で黒く染め、破る。やはり憂鬱なのは五月病のせいか、それともこれが夜空じゃないせいか。

昼の空は何故か上手く描くことが出来ない。水色に染まる空に、白い光を放つ太陽。こんな明るい絵は、苦手だった。こんな性格のせいかな、と自嘲してコンクリートに寝転がった時、俺は静寂の校舎に不似合いな金属が叩きつけられるような音を耳にした。

（…？）

「ったく、なんなんだよ！くそっ」

どうやら、屋上の入り口で誰かが扉に蹴りを入れているらしい。八つ当たりだろうか。出入り口の上にいた俺は一体どんな不良が登ってきたのかと下を覗き込んだ。偶々、影が出来てしまったらしく、登ってきた生徒が俺の存在に気付いてしまった。

「…なんだよ」

栗毛色の髪を少し伸ばした男子生徒。無理矢理後ろで束ねた髪は明らかに地毛ではない色をしている。Ｙシャツを出して、上着を羽織るようにして着ている。これも、学校の規定にそぐわない。明らかに、教師の言う『不良』の格好。

けれど、知ってる。こいつは…

「お前、全校集会出なくていいのかよ」
「…茶髪で長髪の生徒会役員に言われたくないね」

この間、先公に無理矢理総会に出された時、役員紹介で顔を見たことがある。あの時はまだ髪も染めていなかったし、黒髪だった気がする。
俺の返答にそいつは一息ついて頭をかいた。

「ま、それもそうだけど…。で？そっちは何してんだよ、校内でも有名な古栖クン？」

有名、というのは何となく分かっている。多分…否、絶対に良い噂ではない。まぁ、それほど気にしていない。俺は下に向かって言った。

「…絵を描いてた」
「へぇ、噂通り」

そいつはそう呟くと梯子を登って俺の所へ来た。了承もしていないのに勝手にスケッチブックを開いて、中身をパラパラと見ている。

「ほー。結構マトモ」
「それはどうも」

別に見られたって気にも留めなかった。相手が何と言おうと聞き流そうと決めていたから。そいつは幾つかの絵を見ては何度も俺の顔と見比べて、ぽつりと呟いた。

「…お前、絵描けそうな顔してないんだけどな…」

あまりに真剣にそう言うので、俺は口元が歪んだ。

「…悪かったな」

まさかそう言われるとは思ってなかった。つい返答を返してしまう。そいつはその後も何度も人の顔と絵を見比べて笑った。人の良さそうな笑みだけれど、どこか悪戯好きそうな表情も混じっている。

「…へぇ…。お前いつもここにいんの？」

「大体」

そいつはまた俺の顔を見て、へぇ、と呟く。俺にスケッチブックを手渡して、携帯で時間を確認すると、

「あ、そろそろ時間だな」

と言って階段の入り口へと飛び降りる。

「あ、そうそう、古栖！」

「勝手に呼び捨てするな」

ついまた返答してしまった。俺は渋々入り口の方へ行き、そいつを見下げる。茶髪の男子生徒は、また意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

「俺、水無月　時雨。また明日な！」

「ああ、そう……また明日！？」

どうゆうことだよと俺が叫ぶ前に時雨はさっさと階段を下りていった。意味も分からず立ちすくむ俺はこのとき五月病も、じきに来

る梅雨のことも、すっかり忘れていた。死ぬとか、死なないとか、そうゆう思考も、全部。

☆

おちこぼれ生徒会役員、水無月　時雨は『また明日』の言葉通り、翌日も屋上へ来た。絵を描いている俺の隣で昼寝をしては時々起きあがって絵の進行状況を見て、『お前、本当に顔に似合わず絵、上手いんだな』を繰り返した。次の日も、そのまた次の日も。

授業をサボっていることに対して俺も時雨も何も言わなかった。時折俺を授業に連れ戻そうと屋上へ上がってきた教師が、生徒会役員も一緒になって授業放棄していることに目を丸くしていたこともあった。

時雨はどうして役員だというのに髪を染めたり、授業をサボったりしているのか。俺は少しだけ不思議に思ったが、そうゆう私情を聞き出すのは憚られた。なんとなく聞ける雰囲気ではない。俺も干渉したくはなかったし、あっちもそうゆう話に近づくといつも会話を逸らしていた。だから、聞いてみようとしたことはなかった。

このサボリ魔とおちこぼれ生徒会役員の妙な関係が出来上がって大体数十日経った頃だっただろうか？あの時、俺達はいつものように授業をサボって屋上にいた。丁度昼休みの時間で2人で弁当を広げていた俺達の所に、下から鳴る生徒呼び出しの放送が聞こえてきた。

『2年3組柳谷君、至急生徒会室に来てください。繰り返します、2年3組の柳谷君…』

「…2年3組ってお前の組？」

そういえば、この間時雨を3組の所で見かけた気がする。3組にはこいつの他にも役員がいるのか、とそう思った時、弁当に手をつけていた時雨が俺の弁当からエビフライをかっさらった。

「あっ」

俺が何か言うより早く時雨はエビフライを口にふくみ、言った。

「隙あり〜。運が悪かったな、このエビフライ好きの俺の前で弁当広げるたぁ」

「だからって盗るか？普通」

俺が苦笑すると時雨は勝ち誇ったように言って見せた。

「小学校んとき教わんなかったかー？『お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの』」

そう言ってまた俺の弁当からエビフライをとると、満足そうに笑った。明日から弁当にエビフライ入れるの、よそうか…とそう思った時、屋上のドアが盛大に開く音と、応援団並の大声が鼓膜を劈いた。

「時雨先輩、いますか！？」

あまりの大声にキンキンする耳を押さえている俺に対して時雨は何事もなかったかのように下にいる生徒に手を振った。俺も頭を押さえて入り口を見下げる。

「あ、やっほ〜、日和ちゃん。エビフライ食う？」

「いりませんっ！」

日和、と呼ばれた女子生徒はショートカットに眼鏡をかけた女の子で、帰宅部の時雨を先輩呼びするということは、生徒会の後輩らしかった。階段を走ってきたせいか息を切らして、片手に持っていた資料の一つを時雨に向ける。

「今日の今日こそサインして頂きますよ、時雨先輩っ！」

「…サイン？」

そう呟いた俺にやっと気がついたのか、日和という1年生はこちらに軽く礼をして、時雨に向き直った。

「生徒会選挙、出るって言ったじゃないですか！明後日までなんですよ、この〆切っ」

「めんどくさ～。いいじゃん、俺、出なくても…」

弁当を口に含みながらそう言う時雨に後輩は懸命に主張する。

「先輩以外いないんですよ！？会長立候補出来る人が！」

「……会長！？」

運悪く、炭酸飲料を口に含んでいた俺は、その2文字を聞いて吹き出してしまった。時雨は頭をかいて溜息をつく。

「他にもいんじゃん。氷室とか常葉とか氷室とか常葉とか氷室とか常葉がさぁ…」

氷室と常葉の2人しかいないということらしい。俺も名前に聞き覚えがあった。確か2人共成績優秀なことで有名な役員達だ。数人の女子が追っかけをしているのを見たことがある。対する日和とい

う1年生は地団駄を踏みつつこう叫ぶ。

「氷室先輩も常葉先輩も先に副会長の立候補しました！」

その言葉に時雨が小さく「げ」と言ったのを聞いたのは俺だけだったと思う。

「それじゃあ…一年！小風兄弟とかに…」

「あんな馬鹿兄弟に任せたら、数時間と持たないうちに学校がつぶれます！」

日和という生徒はきっぱりすっぱり言い切った。日和は腕時計を見て顔をしかめると、時雨を見上げて怒ったように言った。

「とにかく、明後日までにはサインしてもらいますから！…あと」

後輩の、悔しそうな捨て台詞を聞いて時雨はまた弁当を食べ始める。

「放送が流れたときはちゃんと生徒会室来てください！絶対ですよ！」

「りょ～かい」

そう言って立ち去る1年にのほほんと手を振る時雨。いまの2人の会話に俺は首を傾げる。

「…放送、流れてない気がするんだけど」

確か、さっき流れた放送は柳谷っていう生徒の呼び出しで……？

何も言わず弁当をかき込んでいた時雨は一瞬だけ俺に視線を向け

て、また弁当を食べ始めた。

「ま、そんな細かいことは気にすんなって。ハゲるぞ～」

「誰がだよ」

俺はそう答えながら自分がいつのまにか時雨との会話に違和感を覚えなくなっていることに気付いた。こいつの漫才的なボケを聞いているのは不快ではなかったし、いつの間にか普通に会話をしている自分を最初は不思議に思ったけれど、それもすぐ気にならなくなっていった。

今思えば、時雨も俺も似ている所があったからかもしれない。人と馴れ合うことを露骨に嫌う俺と、人の良さそうな笑みを浮かべながらもそれ以上の干渉を許さない時雨と…。

第5章　月に沈む

今思うと、圭は人の心を読むのが上手かった。ホント、超能力かと思うくらい。まぁ、それが逆にあいつにとっては人嫌いっていうか、人間不信っつーか…とにかく、そうゆうもんになった理由だと思う。たしかに根本の考え方は一緒だったけど…あいつは淡泊過ぎたのかな、全てのことに対して。

昼飯用の弁当片手に階段を登った俺は、片手を上げていつも通りの台詞を叫んだ。この日は梅雨入りのせいで雨が降っていたし、多分雨宿り出来る所で絵でも描いてんだろうと思っていた。

「圭ちゃ～ん、おっは～」

「…」

いつもの、『誰が圭ちゃんだっ』っていう答えがない。俺はあたりを見回して、やっと圭の姿を見つけた。屋上のずっと奥。フェンスの、その向こう。

一瞬、背筋が凍り付いた。雨音と視界不良の屋上で、フェンスの外数十？しか足場のない所に座って向こうを見ている圭の姿。

いつからそこにいたのかと思うくらい、制服が濡れている。しかも、ご丁寧に靴を脱いで自分の隣に置いてあったもんだから俺はつい焦ってしまった。

「…あ、時雨。今日も遅刻…っ！」

フェンスの編み目から手を伸ばして制服の襟を掴む。思いっきりこちら側に引っ張ったもんだから、圭はフェンスに頭をぶつけるこ

とになった。

「お前っ、何やってんだよ！」

「…お前こそ何すんだよ…」

頭を押さえて抗議する圭。けれど俺は掴んだ襟を離さない。ここで少しでもバランスを崩したりしたら……想像したくもない。

「何考えてんだよ！間違ったら死ぬだろ！？」

叫ぶようにそう言うと圭は一瞬きょとん、とこちらを見て首を傾げた。靴を手にとり、それを履きながらこう言う。

「今まで落ちなかったし…落ちたら落ちたで仕方ないことだろ？」

さも運命まかせのような言い方をして圭はフェンスに手をかけて登り始めた。ここのフェンスは少し高くなっているから、手を滑らせたら一環の終わりだ。けれど圭は臆することもなく、こちら側へ降りてきた。

俺は安堵して座り込む。

「はぁ～…心臓止まるかと思った…」

気付くと俺達は仲良く雨の下にいた。しかもそろって制服を濡らしている。俺は溜息をついて、寝ころんだ。たまには、雨に濡れてもいいか。

「…雨宿りしなくていいのか？」

圭が上から見下ろしている。俺は笑って言った。

「たまにはいいんじゃね～？いい男度アップってことで」

圭だけ濡れてんのは不公平だろうし。雨の下じゃ絵が描けないとか何とか言っている圭を無視して俺は雨粒を落とす暗雲を見上げた。湿った空気が気持ち悪いけれど、まぁ、いいとしよう。

「…な～、圭ちゃん」

「圭ちゃん言うな」

やっといつも通りの答えが返ってきたことに安心しながら、俺は起きあがって圭の顔を見た。

「…さっき何してたんだ？」

圭は別に言葉に詰まることもなく、さらりとビル街を見つめて言った。

「いい風景はないかなと思って…探してた」

「あんな危ないトコで？」

頷く圭はどこかいつもと違う、空虚な瞳を校庭の方に向けている。なんとなく俺は、こいつが変わり者として有名になったワケを知った気がした。

「けどなぁ、『落ちたら落ちたで仕方ない』って…ほっといたら自殺でもしそうでヤなんだよなぁ…」

こいつが干渉されるのが嫌いなのは知ってる。自分もそうだけど、こうゆう考え方されると、どうしても何か言わなきゃならない気が

して…もう身に染みてしまった『生徒会魂』というやつか。
俺はなが～く息を吐いて、こう言った。

「圭。…お前さぁ、なんの為に生きてる？」
「死ぬ理由がないから」

来ると思った。俺は予想していた返答にそう思いながらも、その返答に返す言葉がないと自嘲する。濡れた猫っ毛に指を絡ませてつまらなそうにしている圭に俺はもう一つだけ聞いてみた。

「お前、干渉されるの嫌いだろ？」

一瞬、圭の表情が強ばった。ビンゴだと俺は思いつつ、次に来る言葉を予想する。

「…それはお前もだろ」

上擦る声で切り返した圭の言葉。予想通り、俺の話を出してきた。俺はそれを無視して話を続ける。

「お前絵以外にしたいことないワケ？勉強もしてるっぽいけどさぁいかにも義務ですって感じだし…」

圭の表情の変化に気付きながらも俺は知らないふりをして返答を待つ。こうなったらヤケだ。自分ばっか人に干渉するのは反則かもしれないけれど、…もう決めた。

「…それはお前に関係…」
「関係ないって？へぇ…」

俺は冷静を装って圭を見た。せめてこの、生きることに対して淡泊すぎる所をどうにかしたい。らしくもない、溜息をついて圭の目を見る。雨音が耳の中で雑音として響き回る。怒れ。せめて俺が、こいつの中で怒りの感情を起こすくらいの存在であってくれ。

どうかいつもの、皆の怒りを買う、あの人を小馬鹿にする笑みが出来ていますように。

「…逃げんの？」

「！」

相手が何か言う前に俺はさっさと立ち上がり、階段への出入り口のドアを開けた。圭が何か言ってるけど、それを無視して俺は言った。

「なー、圭！俺と賭けしねぇ？」

「はぁっ！？」

俺は雨の中で立ちつくす圭を指差して、叫ぶ。雨音にかき消されないように、淡泊なあの考えを吹っ飛ばせるように。

「生徒会選挙、俺が会長に信任されたらお前のその考え、改めること！…もし俺が落ちたら、俺はお前の考えに干渉しない」

俺の信頼度が校内で一気にダウンしていることは、圭も俺も知っている。会長立候補はかなり難しい。無理かもしれない。けど、やってみないで逃げるのよりはマシだ。

圭は少し下を向いて、考えているようだった。けれど、すぐ顔を上げて言い返す。

「…分かった。賭ける」

「よっし、そんじゃ、選挙んときは絶っ対集会出ろよ。絶対だからな」

あの時はノリで言ってたけど…今思うとすんげー賭けをしたなぁ。無謀、無謀。似合わないことはしないほうがいいな、マジで。

まぁ…この時から、選挙の日まで俺は圭とは会わなかった。その間に圭が何を考えてたかは分かんねーけど…。

☆

「それで？あなたは信任されたの？」

カンバスを返し、美術室を出ると時雨は廊下を歩きながら笑った。

「…俺、生徒会長に見える？」

私は謙遜するでもなく、時雨を下から上まで見直して、言った。

「見えないけど」

「…お世辞でも見えるって言って欲しかった…」

時雨の栗毛色の髪は染めたままであるし、髪も多分、来栖　圭と出逢ったときから切っていないだろう。髪の長さからしてもそう思える。私はあの幽霊の気配を探しながら、隣を歩く時雨を見上げる。

「その様子をみると、髪もそのままで選挙に出たようね」

「ぴーんぽーん。鋭いね、君」

どうも、と軽く答え、私は廊下を見渡す。ここの近くに気配はない。けれど行動範囲からしてこの学校内にいるはず。

「…古栖はいつも屋上にいた？」

「ん？まぁ、屋上にいないときは美術室だったけど…」

人は生前自分が過ごしていた場所に捕らわれやすい。多分、あいつも屋上付近を彷徨っているのかもしれない。

「屋上に、案内してくれる？」

時雨は笑って頷いた。人の良さそうな笑みだった。

「おっけ～」

☆

久しぶりに、集会に出たような気がする。何百人と生徒の並んだ体育館に俺は人酔いしそうな感覚を覚えながらも自分のクラスの一番後ろに座った。クラスメイトや他のクラスの奴らの視線が集まっているのは知っていたけれどあえて無視していた。

どうやら、会長立候補は時雨だけらしい。信任か不信任かを問う選挙になるらしいが、最近の時雨の変わり様に校内での不信感は高まっている。

副会長立候補は2人。常葉と氷室。身長が低く、女顔なのが常葉で、眼鏡をかけていて物静かそうなのが氷室。ちなみにどちらも男子。そして会計監事が…この間時雨の説得に来ていた日和という女子生徒。こちらも信任、不信任を問うらしい。

最初に会計監事立候補者と副会長立候補者の演説があった。あの日和という女子生徒は人を惹きつける様な話し方で演説も上手く、後ろにいた教師達の感嘆の声が小さく聞こえた程だった。副会長立候補者の2名も公約を提起した上での演説、常葉という女顔の生徒にいたっては、『会長のサポート役として…』という言葉まで使っていた。

立候補者4名のうち、時雨を除いた3名は信任されるだろうという空気が、俺にも見てとれた。ただ、時雨は立候補者の中で1人だけ不利な状態に立たされている。

ふとそんなことを考えていた自分に気付いて、俺は1人頭を振った。数週間前に時雨に言われたあの一言を思い出すと、時雨なんか不信任になれという半分ヤケのような感情も入り交じっていた。

『…逃げんの？』

逃げてなんかいない。それはお前の方だ。時雨が落ちたら、そう言い返してやろうと心に決めていた。選挙の為だけに外見だけ取り繕って真面目に見せてもどうせ、いままでの時雨の生活を皆知っている。どんなに頑張ったって信任されるわけない。

そう思った俺の耳に、館内のざわめきが木霊し始めた。どうやら、時雨の番が来たらしい。一体時雨はどんな演説をするのだろうか？たとえどんなに真面目な話を持ってきた所で、結果は変わらない。そう笑ってやろうと、思っていた。

けれどやはり時雨は俺の予想を何倍も裏切った。初めて会話をした時…迂闊にも素で返答を返してしまった、あの時と同じように。

登壇した時雨の格好に、館内のさわめきが一層強まった。少しはマシな格好をしてくるだろうと予想していた生徒や、教師、そして俺を裏切って、あいつは今までと変わりのない、いつも通りの姿で現れた。Yシャツを出して、上着のボタンをかけず、栗毛色に染めた長髪はそのまま、しかも手ぶらで演説用に用意した紙さえも持っ

ていない。
前代未聞の格好で現れた会長立候補者に、生徒達は動揺を隠しきれないようだった。俺はもう動揺以前の問題で、固まってその様子を見守るしかなかった。教師達も同様。こんな異様な空気の中、笑顔でいられたのは時雨の『作戦』を知る生徒会役員達だけだったのかもしれない。
時雨はマイクのスイッチを入れ、ざわついている館内の生徒にまず一言、こう言った。

「生徒会長に立候補しました、柳谷　時雨です」

（…柳谷？）

我に返った俺は、性格に似合わず緊張しているらしい時雨の顔を見返して首を傾げる。あいつの名字は水無月だったはず…。
時雨は、生徒を右から左まで見渡しながら一つ一つ白状していった。苦笑いを浮かべながら、時雨は言う。

「多分皆知ってると思うけど…俺はいままで、授業サボってました」

まさかこの場でそんな悪事の白状があるとは思わなかった生徒達の混乱は、増す一方だ。教師達の数人が頷いているのが見える。

「まぁ、見ての通り髪も染めてるし、伸ばしてるし…センコー達から見たら問題児にしか見えないと思う。…あ、それは皆にも言えるだろうけど」

ばつの悪い子供のような表情をしながら、時雨は頭をかいた。

「…犯罪行為まではしてないけど、人の弁当の中身盗ったりはしま

シタ」

いや、それは言わなくていいだろと、どこまでも俺の予想を裏切る時雨の発言に、俺はつい、つっこんでしまいそうになる。

けれどそんな時雨の言葉は少しづつ生徒達のざわめきを鎮めていった。

「生徒会の仕事もサボりっぱなしで…なんかもう手のほどこしようもないくらい反抗してました…ガキみたいだけど」

時雨の言葉に生徒会役員達が苦笑する。あの日和という後輩は盛大に頷いてみせる位だ。時雨は続ける。

「まぁ、それには事情があって…クラスの奴とある1名は知ってると思うんだけど俺、前は水無月　時雨って名前でした。…言わなくても意味は…分かる、よな」

時雨のクラスの数名が、ざわざわと何かを囁き始める。それが他の生徒にも伝染して、また館内に雑音が木霊していく。

「…多分…」

時雨の言葉に、雑音が一気に途切れた。

「…多分『これ』は、俺のただの悪あがきなのかもしれない」

いつの間にか時雨の表情の中から消えていた笑顔。名字が違うというのは、多分親の離婚とかそうゆうことだろう。俺は黙ったまま、講壇を見上げる。

「けどやっぱり、急にこうゆうことになると…予想してたより自分が脆いなって気付いた。…けどさ、おかしな事に妹はグレてないんだよな」

俺ってダメ兄貴？とか冗談混じりに演説しながら、ふと真剣な表情に戻り、話を続ける。この時雨ならではの演説の仕方に、他の立候補者達とは違った人の惹きつけ方がある。俺はこのとき、確かにそう思った。

「急に片親になって、それで混乱してんのは俺がガキなせいか、それとも」

はっきりと、時雨の視線がこちらに向けられたような、そんな気がした。

「……怖くなったのかもしれない」

いつの間にか全校生徒が、教師達が、登壇したその立候補者の演説に視線が釘付けになっていた。悔しいけれど、俺もその中の１人になっていて。

まるで、自分のことのようだったから。

「片方の『親』って存在に見離されたような気がしてたのかもしれない。だから、人と関わるのが嫌になった…。…だからこうやって反抗して」

今まで誰も信じなかった。…信じられなかった。干渉されるのを拒絶して授業をサボって、ずっと絵を描いていた。それは、きっと

「怖かったんだ…けど、反抗してみて分かったこともあって。まぁ、

何があったかは皆の想像に任せるけど」

悪戯そうな笑顔でニッと笑うと時雨は館内を見渡した。1人1人の顔を見るようにしながら、語りかける。

「…それじゃあ、誰とも関わるのが嫌だっていう人間に必要なものって何だと思う？」

時雨の問いに生徒達は顔を見合わせ始めた。首を傾げ合い、『なんだろ？』と互いに考えを探す。生徒はおろか、教師も首を傾げていた。時雨はその様子を確認して少し間を取ると、微笑って言った。

「…まぁ、色々あるとは思うんだけど、俺の意見としては…『信じられる人間』だと思う。だって、信じられる人間がいなきゃ人生やってらんないじゃん？」

前列の奴らが時雨の言葉に笑う。時雨も笑って流そうとしたけれど、その一言に俺は反応してしまった。

「…信じられる人になる、信じられる会長になる、信じられる生徒会にする。当たり前のことだけど、これって一番大事。だろ？…だからこれが俺の公約」

公約。そう言われて俺はやっとこれが演説だったことを思い出した。周りの奴らも同じだったらしく我に返ったばかりのような顔をしている。時雨は最後にこう付け足した。

「…少し暗い話題になったけど、俺の言いたいことはこんな感じかな。…たしかにさ、いままで色々迷惑かけてた奴なんかに会長はさせない方がいいかもしれないけど…」

あいつの笑みは無敵だった。俺はこの言葉を聞いた瞬間、負けたと確信した。

「人生長いんだし、これくらいの賭け、しときたいじゃん？」

初めて会った時と同じように、時雨はあの悪戯好きそうな笑顔を浮かべていた。

第6章　紅色の月

「やっほ～、小風弟。集計終わった？」

講義室で集計をしていた選挙監理委員が一斉にこっちを振り向いた。俺の顔を見た後、一拍置いて慌てて周りの投票用紙をかき集めだす。　やっぱ、来たタイミングが悪かったか。

「うわぁっ！？時雨センパイっ！何やってるんですか！？」

山積みにされた投票用紙の中から見慣れた顔が覗く。生徒会1年の名物双子（もちろん命名は俺）の小風兄弟の片割れだ。生徒会の中の委員会担当になっていた弟クンは慌てて俺を講義室の隅まで引っ張っていく。

「まだ集計終わってないんですよ！っていうか、普通候補者が様子見に来たりしません！」

「いや、氷室も常葉も日和っちゃんもどっか行っちゃうしさ～。暇だったから」

来てみた、という俺に小風は来ないでください！とつっこむ。俺は慌てて作業しだした委員を見回してふと首を傾げる。

「…そういや弟。兄ちゃんは何処行った？」

弟は自分と同じ顔を探して後ろを振り向く。するといつの間にか投票用紙の海で溺れている一名を発見。

「おいっ、何やってんだよバカ！」
「ゆ～う～、助け…」

ごぼごぼ、と埋まっていく同じ顔。マンモス校の桜丘の全生徒の投票用紙だから埋もれてしまうのも分かる。これは結果が出るのは明日かな、と思いつつ俺は結果が見えない隅っこで座っていることにした。

弟に罵倒されながら、同じ顔の兄貴の方が走ってくる。小風兄弟は同じ顔でも性格はまるで正反対という面白い1年達だ。

「あー、時雨せんぱ～い。お疲れさまです」

開票してない所をみると、弟に『あっち行って静かにしてろ』とでも言われたのだろうか？…いや、まて、それじゃ俺は兄貴と同レベル？

「お疲れ…やっぱ結果が出んのって明日になるか？」
「うーん…多分そうなりそうです」

首を傾げるボケ兄貴の方に、俺は耳元でこそっと言う。

「なぁ、いまんとこの俺への信任の票ってどうなって…」
「時雨センパイっ！」

向こうの方からツッコミ弟の喝が飛んでくる。俺は笑って誤魔化すと、隣の机の上にあった投票用紙に気付いて、兄貴の方の肩を叩く。

「小風兄。…これ、集計しなくていいのか？」
「あ～、これ白紙とか票に入らないヤツなんですよー」

「…こらなら見てもいいよな？」

多分～、と返答する天然兄貴の答えを聞いて俺は一枚を手に取った。記入の仕方は下に書いてあるはずなのに、どうしても規定以外の書き方をするやつはいるらしい。〇で記入するところを鉤でしるしをつけたり。花丸にしたり。

（あ～あ、これ俺の票じゃん…もったいね～。…これもかよ、誰だよ花丸にしたやつは…これも…あ、これは白紙か……あと、これも……？）

ある一枚を見た俺は一瞬固まった。その後、笑い出しそうになるのを堪えて、口元を押さえる。小風兄弟や委員に見つからないようにその投票用紙をポケットにいれると俺は外へ出る。

「おれ、氷室達探してくるわ。そんじゃ小風、頑張れよ～」
「はーい」
「はい」

後から聞こえてきた双子の声を確認して、俺は目の前にあった階段を登っていった。

☆

「おいっ、圭っ！」

珍しく入り口付近にいた圭の姿を見つけたとき、俺は思いっきり扉を開けて叫んだ。もしかしたら口元が笑ってるかもしれない。そ

う思いながら。

「お前、投票用紙に何書いてるんだよ！」

「ああ、それ？」

圭はカンバス片手に空を見上げていた。こちらを見なくても何のことだか分かったんだろう。笑いを堪えるようにしながら、圭は答える。

「…ただ普通に書くのは癪だったから」

俺はもう一度手に持っていた投票用紙を見る。投票は候補者の欄に○を記入するだけの簡単なものだ。なのに、こいつときたら、ご丁寧に自分の名前まで書いたうえに。

『柳谷　時雨　◎』

「お前なぁ、これじゃあ俺に票入らないんだよ！」

規定は、○を付けること。たとえそれが◎であったとしても認められない。圭は満足そうな表情でこっちを見る。

「だからやったんだよ」

そこまでいうと圭も堪えきれなくなったらしく、吹き出した。俺もつられて、腹をかかえて笑い出す。もう暮れだした空が段々と薄暗く、藍色に染まり出す。透明な月が、ゆっくりとその存在を現し始めた。

俺達はひとしきり笑うと、空を見上げて寝転がった。笑いすぎてひーひー言ってる俺に圭が言う。

「…時雨、信任されそうな感じだったな」
「え！？マジで？」

はっきり言ってもうステージで何を言ったかさえ覚えていない。緊張しすぎて頭がスパークしていたのかもしれない。変なこと言ってませんように。

「最後の言葉聞いたとき、負けたなって思った」
「最後…ああ、あれ」

人生長いんだし、これくらいの賭け、しときたいじゃん？

「ってか、あの演説…」
「というより、全部…」

俺達は顔を見合わせて、また視線を無限の空へ戻す。光を取り戻し始めた月がゆっくりと街を照らし始めていた。

「……クサかった……」

同じ言葉をハモって、俺達はまた吹き出す。

「だよな、だよなっ。俺もう自分で何言ってたか分からなくなるくらいクサくてさー」
「クサいって分かってるならもっと普通の演説にすればよかっただろ」

圭も俺も、息が切れるくらい笑っている。

「そんなこと言ったって、考えつかなかったんだよ…あ～、腹いてぇ」

息を整えて、圭はまた視線を上空へと向けた。

「けどまぁ…賭けに負けたんだから、考えは変えるとするか」

その横顔に悔しそうな表情は混ざっていなかった。少しくらい悔しそうな顔をしたら皮肉の一つでも言って笑ってやろうと思ってたっていうのに。

ま、いいか。圭の一票は不信任にはならなかったわけだし。俺は大きく息を吸って、言った。

「さーて、帰るか」

圭も微笑って頷いた。

「ああ」

☆

美術室特有のあの絵の具や石膏の臭いが混ざったような空気。顧問も、他の部員達もいなくなった美術室は静かで、そして何処か物悲しい気分にさせる。昼間の校内の喧噪が嘘のように、時折自分がたてる物音にしか余韻を残さない。

開け放した窓からカーテンを揺らし、入ってくる風が頬に当たって心地よい。俺はパレットに残った油絵の絵の具を混ぜながら最後の仕上げにかかっていた。

水面に反射する月光と、弧を描くように揺れる光の粒子。白とも黄色とも言い難い、特殊な月光を作り出す絵の具。それを今まで書いてきた絵につけたしていく。

珍しく明るい絵を描いている自分を何度意外に思っただろう。描いているのは今までと同じ夜の風景なのに、何処かが決定的に違うようなそんな気がする。それは月の光が増したのか、それとも白蓮が中心的存在になっているせいか。

よく有名な画家の絵にはその絵を描いた当時の心境が映し出されているという。自分をそんなたいそうな人間と比べようとは思わないけれど、何処か変わった部分が自分の中にもあるのかもしれない。ふと静寂に包まれていた校内に一つの足音が響いてきた。明らかに教師の足音ではない、廊下を駆ける音に俺は一息ついて筆を置く。

室内の時計を見上げると、その短針はいつの間にか6時を差していた。

途端に入り口から聞き慣れた声が響く。

「圭っ！そろそろ帰ろーぜ」

「ああ。丁度終わったところだし」

顔を出した時雨に振り返ってそう言うと、俺はさっさと片付けを始めた。物珍しそうに俺のカンバスを覗き込んでいる時雨は、油絵の臭いで眉間に皺を寄せながら首を傾げた。

「…なぁ」

パレットの絵の具を落として、筆洗を探していた俺にカンバスを指差して時雨は言った。

「…いままで下絵しか見てなかったからかもだけど…なんか色がつくと違うな」

「そりゃあ、下書きは白黒だったし」

俺が筆を洗っている間に時雨はまた難しそうな顔をしてカンバスを見つめている。だから俺は筆の柄の方で時雨の頭を一発叩いて聞いてみた。

「いでっ」

「そんなに興味あるんなら描いてみればいいじゃんか」

ようやく1つに結べるくらいの長さになってきた時雨の髪は生徒会長に就任した今でも茶色のままだ。教師に何度か呼び出しをくらっている所を見たけれど、どうやら染め直すつもりはないらしい。

時雨は頭を押さえ、苦笑いを浮かべた。

「絵だけは勘弁してくれよ、俺、本っ当に下手なんだって」

筆を仕舞い、室内の片隅に置いてあった自分のバックを拾い上げると、俺は時雨の方を振り向いてこう言った。

「まぁ、そんな感じしてるよ。特に顔が」

「顔！？」

窓に鍵をかけ、戸締まりをする。入り口の鍵は警備員か顧問が最後に閉めてくれるはずだ。俺はまだ美術室の中にいる時雨に声を投げる。

「…冗談。前、お前も同じ事言ったろ？そのお返し」

「お前、最近意地悪になったんじゃないか？」

泣き真似している時雨に俺は微笑ってやった。

「…誰のせいだか。ほら、帰るぞ」

澄んだ橙色の空が、虚空を彩っていた。南風と共に揺れる、常緑樹達が葉擦れの音を響かせる。東の空はもう、夕闇の気配が覆っていて、そこから夜が街全体を包んでいくのだと知る。

いつの間にか日課となった時雨との下校。最近は俺も時雨も生徒会で遅いから、下校するのは今くらいの時間だ。俺も時雨も途中まで帰り道が一緒なので、そこまでは2人で歩いていく。

以前の俺なら、誰かとこうして会話をしながら下校するなんて考えられなかった。よく時雨にも『お前、性格が丸くなったよな』と茶化されたりもする。俺の変化に関して一番驚いていたのは教師達だったらしく、たまに真面目に授業に出てみたりすると目を丸くして驚く。クラスメイトも同じ反応だった。ただし、クラスメイトの場合は机に座っている俺を見て、クラスを間違えたかと確認するくらい。

教室でも最近会話をすることが増えてきた。何が引き金になったかはよく覚えていないけれど、確か隣の女子が落としたペンを拾ってやった時かもしれない。どうやら俺は今まで冷徹な奴だと思われていたらしく、そのことがきっかけで俺に対する印象は一気に変わったようだ。別に嫌な気分はしないけれど、俺は今まで必要最低限の人間の名前しか覚えたりしない主義だったから、クラスの奴らの名前を覚えられるかどうか、そこがかなり不安だったりする。

まぁ、自称『人気者・時雨様』に言わせると、

「そうゆう時はなぁ……とにかく相手に合わせとけ！」

だ、そうだ。…あんまりアテにしない方がいいかもしれない。でも、こうやって少し前向きな考え方が出来るようになってきたのは、こいつのおかげなのかもしれない。

俺はふとふざけている時雨の顔を見て、そんなことを考えていた。本人は俺がそんな事を考えているなんて全然分かっていないらしく、相変わらずあの意地悪な笑みで今日生徒会であったことを暴露しては楽しんでいる。

多分こいつとあの屋上で会わなければ、俺はまだ、あのフェンスの向こうで月を眺めていたのかもしれない。

「そういえば、もうすぐ夏休みだよな～」

ふと時雨が思いついたようにそんな声をあげた。まだ梅雨も越していないのに夏の話をするのは少し気が早いが、休みという言葉には確かに惹かれる。

「圭は何して過ごすんだ？」

肩まで掛かるようになった茶髪を結び直して、不良生徒会長が不敵な笑みで振り向いた。企んでる。絶対何か企んでる。俺は警戒しつつ、毎年のことを思い出して言った。

「…絵を描くと思うけど？」

もしかしたら俺は時雨の期待通りの答えを返してしまったのかもしれない。俺の言葉を聞いた時雨はニヤと形容するに相応しい表情を浮かべて、肩を掴んできた。

「健全な男子高校生が夏休みに絵を描くだけなんて非常識！山でも海でもいいからパーっと、行こうぜ！」

「…時雨、目的は？」

「バイトとナンパ！」

くると思った。俺は呆れて溜息をつきながら、時雨のその脳天気さに脱帽した。

「パーっと、とか言いながら仕事付きだろ？ナンパは1人でやってくれ」

「いや、オプションはついてた方がいいなと…」

あはは、と笑っている時雨に俺は仕返しとして、現実を突きつけてやった。夏休み、と喜ぶ前にもう1つイベントがある。それもかなり重要で、地獄の…

「…時雨、夏休みの前にテストがあること忘れてないか？」

ぴた、と笑いが止まる。この分だとテスト勉強なんてこれっぽっちもやっていないようだ。

「…圭。言うなよ、人が忘れようとしてんのに！」

いつの間にか泣きそうな顔になっている時雨に俺は涼しい顔で連呼してやった。時雨が耳をふさぐ位に。

「テスト、テスト、テスト～」

「言うなっ！」

こうやって誰かと帰ることも、前の俺なら考えられなかった。死ぬとか、死なないとかそんな複雑な思考を忘れて、笑い合えることも。

違った生活も、誰かと話をすることの楽しさも知らなかった。

1人で殻をつくって閉じこもっていたのは、無意味だと思ったからじゃなくて…ただ怖かったんだ。

「お～い、圭。着いたんだけど？」
いつの間にか、十字路まで来ていた。俺はここで左折して、時雨は真っ直ぐ帰路に就く。歩行者の信号が青になっているのを確認して俺は時雨を振り向いた。

「あ、悪い。ぼーっとしてた。…それじゃ、また明日」
「じゃな」

今日は珍しく信号で止まる車がない。俺は白線の引かれた横断歩道を歩いていき、ふとこちらに背を向けて歩きだそうとしていた時雨を振り返った。夕焼けの濃いオレンジの光がコンクリートも空と同じ色に染まっている。多分、この風景が全部夕焼けの色に染められているのだと思った。

「…時雨！」
「ん？」

振り返ったその表情に俺はふと笑った。言葉も、笑顔も自然に湧き上がってくる。きっとそれはこいつのおかげだと思うから。

『ありがとな』

時間が止まったような夕暮れの風景。果てしなく遠くに見える月が色を取り戻しながら東の空を昇りつつある。この時俺は車道の音も、街の喧噪も忘れて、たった一言、そう言おうとした。
けれど、時間が止まったように思えたのはそのせいだけじゃ、なかった。一瞬、時雨の表情が曇った。あの時雨らしい笑顔が瞬間的に消え、持てあましていた鞄が手からすり抜け、地面に叩きつけられた。けれど、それを拾い上げることもせず、時雨はこちらに向か

って何かを叫んだ。…叫んでいた。
首を傾げる俺は、ふと自分の上に突如現れた影にゆっくりと振り向いた。視界の、全てを覆いつくすような、『それ』は何かしらの高音を鳴らしていたようだった。
風景が一つの絵のように止まっていた。けれど、もしかしたら1ミリずつ動いていたのかもしれない。コマ送りで流れていく一つの時間に、俺はただ立っているしかなかった。榛色に染まった空が、梅雨間の快晴としては出来すぎたほど綺麗に流れていく。きっと、同じ瞬間は2度と訪れないのだろうと心の何処かでそう呟いた。
視界が完全に遮られる。ふと、開けた風景を探して視線をあいつのいる歩道の方へと戻そうとする。
その瞬間になって、やっと俺は時雨の叫んでいた言葉を認識した。

「……圭！」

そしてやっと、世界が通常の流れに引き戻されて見上げた天空はその色を榛から真紅に変え、純白の光を放ちつつあった月も緋色に染まった。衝撃を感じる暇もなく体は熱砂のように熱を帯びて熔けていく。流れ落ちていくものは、自分という存在を作りあげてきた皮膚か、骨か、血か。それともすべてを支えていた『心』だろうか？
『誰か』の呼び声も、人々の叫び声も何もかも眠りを妨げるものでしかない気がする。ゆっくりと何かに沈んでいくような気分と共に俺は視線だけを空へと向けた。そこにあったのは、何億年も変わることなく虚空に浮かび続ける1つの球体。闇に光を差し、幾度となく世界を照らし続けた、月が儚くも淡い光を放っていた。

『ずっと月を見ていた気がする……』

時を終わらせることなんて簡単にできると、そう思っていた頃も。
生きなければならないと悟った日も。
そして…

死に逝く、今も。

☆

「一応役に立てたかなぁ、留衣ちゃん？」

まるで礼でも請うように口元をつり上げる時雨の表情。私はその馴れ馴れしい言葉遣いを指摘するのは諦め、溜息混じりで上辺だけの礼を呟いた。満足そうな不良生徒会長に私は頭を押さえる。そしてふと視線を先を歩く古巣　圭に向けた。
先程の時雨の言葉で思い出したのか、それともその前に記憶が甦ったのか…。まるで虚像を見つめるような瞳が、廊下の窓から外へと向けられていた。それはまるで生前の彼の様子をそのまま見ているようだった。

（事故死…）

古巣　圭は事故死だった。信号機が変わる直前で横断歩道の真ん中で足を止めた古巣が直進してきたトラックと衝突する形になってし

まったらしい。運転手のよそ見運転も、彼が死ぬ原因となった。
玄関の前まで来て、私は拝借していた来賓用のスリッパをローファーと履き替え、ふらふらと危なっかしい調子で先を歩く幽霊を追いかけようとした。だが、時雨はそんな事におかまいなく、私に問いかける。

「で、一つ質問してもいい？」

「…何？」

さっさとして欲しい、と目で訴えたつもりだが、気付いただろうか？時雨は笑みを一つ浮かべ、私が一番警戒していた一言を発した。口元に笑みをたたえながらも、笑っていない瞳は真剣で、私は逃げ出すタイミングを完全に失う。

「…圭と留衣ちゃんって知り合いじゃないだろ？」

一瞬自分の脈の音が聞こえた気がした。肝が冷えるとはこのことだろうか？私は逃げ道を探そうと思考を巡らせつつ、靴のつま先で地面を蹴った。

「…それはイエスとノーだけで答えろという意味に取っていいようね」

固まった表情をほぐし、勝ち誇った笑みを浮かべて私は答えた。時雨が質問の仕方に間違い、小声で「やべっ」と言ったのを聞いたけれど、私は返答が来る前に先手を打った。

「…そうね、知り合い、というわけじゃないわ」

負けました、と白旗を揚げている時雨に私はかかとを直しつつも

う一言付け加えた。

「悪戯もたいがいにした方がいいと思うけど。…言う気はないようね」

時雨もばつが悪そうな表情を浮かべ、一つ息をついた。ふと視線を肩越しの外の風景に向けて、そして苦笑する。その瞳は、明らかに先を歩く古栖に向かっていた。

「…『ノーコメント』ってことにしといてくれる？」

時雨の声は本人に届くこともなく。向こうに見える榛色の空は、もう戻れない過去を再現するかのように一日の最後の光を放ち続けていた。

私は時雨に別れを告げ、その後を追って足早に歩き出す。時折校内を歩く生徒の視線をかったが、校門を出てしまえばさほど気にならなかった。南風の風が髪を揺らし、頬を撫でて通り過ぎる。

光を纏って西の空に沈む太陽がいつの間にか曇を巻き込んで、薄暗くなりつつある空に闇を呼ぶ。宵の風景が輪をかけて暗くなっていった。

夜が来る。この日は漆黒の空の上に光の粒子が散らばることもなく、淡い月の姿も見つけることが出来なかった。

第7章　透明な月

「考える時間は必要でしょう」

留衣は、そう言った。まだ混乱している思考の中で聞いた言葉だからはっきりとそう言ったかは覚えていないけれど、留衣は俺が答えを出すまで待っていてくれるようだった。けれど、それに甘えるわけにもいかない。

雨雲を連れて、最後の梅雨が訪れていた。春と夏の境目にあたる激しい雷雨が降りしきる中、教室では最終テストにペンを走らせる音だけが響きわたっていた。窓際の席に座っている留衣も長い黒髪を耳にかけ、無心に手を動かしている。時折遠雷の音が響くと楽しそうに笑う者や怖がって小さな悲鳴をあげる者がいる。たいがい怖がっているのは女子生徒だった。

今年は夏の訪れが少し遅い。6月から梅雨に入り、明けるのは7月中盤だそうだ。俺にとっては長かったようなこの1ヶ月半が、もうすぐ終わろうとしている。

窓の外には視界を遮るいくつもの横殴りの雨が空から地面へと落ちていき、地面は湿り気を帯びて徐々に水たまりをつくっていった。ふと留衣がペンを書く手を止め、教卓の上にある時間を確認した。まだ時間が数分残っていることを確認した留衣は俺と同じように外の景色に視線を向け、ゆっくりと溜息をついた。

『雨ってさ…』

俺はガラスの向こうで流れる一つの空間の風景を見つめながらそう言った。ペンの音と雨音しか反響しない教室で、俺の声だけが留衣以外の誰にも聞こえることなく透明な反響となって消えていく。

喋ることの出来ない留衣は視線だけをこちらに向けた。

『雨って憂鬱だよな。雨音が単調だからとか、視界が悪くなるからとか、そういうんじゃなくて…なんか憂鬱になる』

頬杖をついて窓を見上げる留衣に、振り返った俺は言った。

『けどそれって、何かを期待するから、待っているからこんな気分になるんだと思う。…上手く言えないけど』

表情も変えずに俺の話を聞いていた留衣がふとペンを持ち、テストの問題用紙の隅に薄く文字を書いた。コツコツ、とそれを叩いて、俺の注意をそちらに引き寄せる。流麗な字体が綴りだした言葉は、たった一言だった。

【考えがまとまらないうちに答えを出すな】

留衣らしい、すっぱりとした言葉。俺は一瞬だけ吹き出して、寝る体勢に入っていた留衣の一瞥をくらった。ごめんと、にやける口元を抑えて笑う。

『ありがとな』

俺がそう言うと留衣は顔を隠して無視した。至近距離の照れ隠しは分かりやすい。寝ているフリをしている留衣に俺は苦笑を隠してまた視線を窓へと向けた。

『言いたいは言わないと、いつ言えなくなるか分からないから』

そんな俺の独り言は多分誰にも届かなかったと思う。響く雨音が

俺の言葉をかき消して、流れていった。

☆

「さーちゃん！」

終了の鐘の音と共に留衣の背中に激突してきた小動物に、留衣の体がバランスを崩した。溌剌とした表情を浮かべる島崎が、何かを訴えるような視線で踏みとどまった留衣を見つめている。尻尾を振る子犬のような島崎の隣で微笑む藤堂。その２人を見て、留衣は苦い表情を浮かべた。

『？』

「ちょーだいっ」

意味が分からずこの状況を見守るしかない俺に留衣は鞄の中から何かを取りだした。頭を押さえつつ、盛大な溜息をつく。

「言っておくけど、選手になるなんて一言も言ってないんだから、これでいいでしょう？」

島崎の顔に取り出した一枚の用紙を押しつけつつ、留衣は言った。顔から離した紙をまじまじと見つめた島崎が頬を膨らませるのと、後ろから覗いていた藤堂が微笑むのがほぼ同時だった。

「……さーちゃん？」

「留衣さんらしいですね」

島崎の隣からその用紙を盗み見た俺は思わず目を擦って、もう一度その紙に視線を向ける。留衣の名前が書かれたその用紙は、入部用のカード。そこには『バスケ部、マネージャー』の文字がしっかりと記入されている。

『留衣、部活入んの！？』

うるさい、と目で訴えるその表情を見て、勧誘の凄まじさに負けたんだろうと俺は悟った。いつもより怖い顔をしていたから。

どうしても選手として入部させたかったらしい島崎を宥めて、藤堂が微笑む。

「部長、いいじゃないですか。留衣さんにはベンチコーチをしていただけるということになるんですから」

その一言に島崎の表情がぱっと華やいだ。

「あ、そっかぁ。そしたら監督もやってもらおうよ、あさっち」

どうやら顧問の存在を忘れているらしい2人。留衣は恨みがましい目で藤堂を見つめる。けれど藤堂の表情はニッコリと微笑んだままだ。

「藤堂……余計なこと言わないでくれない？」

「あら、私も昔からの付き合いですから、留衣さんの弱点くらいは知ってますよ？」

しつこく頼まれたら断れないところ、と藤堂は不敵に笑った。あからさまに盛大な溜息をついてみせる留衣だったけれど、藤堂は動じない。2人の間に挟まれながらも、会話に入れなくなっていた島

崎が兎のように跳ねる。どうやら2人の視界に入りたいらしい。

「それじゃっ、今日掃除が終わったら、先生の所に、行ってねっ」

視界の隅を邪魔している島崎の頭を押さえつけ、その上に頬杖をついて答える。

「……面倒」

「すぐに終わりますよ、入部の話をしてくるだけでいいんですから」

下敷きにされている小動物の頬が膨れていくのを見ながら、藤堂は留衣に視線を向けた。反抗している島崎を離して、留衣は頭を押さえた。もの凄く不愉快そうな表情を浮かべている。何も言い返さないのが逆に怖い。

1歩ずつその場から後ずさりしていた俺に一瞬だけ留衣が視線を向ける。こちらを見た、というより睨まれたような感じだったが。八つ当たりされそうな予感…。

「……掃除に行ってくる」

身を翻して歩いていく留衣の後ろを俺はゆっくりとついていった。今下手な事を言ったら、八つ当たりされかねない。

（……けど）

いつもの「面倒くさい」オーラを振りまく留衣の後ろを見ながら、俺はふと思った。

（結局、毎日部活に行くんだろうな）

緩む口元を隠して、その後ろをついて歩く。なんとか本人には気付かれずに済んだけれど、もし留衣が一回でも振り返っていたら……どうなっていたか、分からない。

☆

『留衣、部活は？』

顧問の下へ入部届けを出した留衣がその足で向かったのは、体育館ではなく玄関だった。下駄箱の羅列の中に立つ留衣に俺は体育館への通路を指差して尋ねる。本人は俺の言葉に手を止めることなく、外靴に履き替えていた。

「顧問が職員会議で部活の方に行けないから…明日来いって」

『島崎達、怒るんじゃ…』

無数に突き立てられた傘の中から留衣は朝、さしてきた傘を探し出す。外は見事なまでの土砂降りで、留衣は軽く溜息をつきつつ傘を広げた。

「その代わり明日の朝練の時に来いって。どっちに行っても同じでしょう？」

歩き出す留衣を慌てて追う。雨に濡れる心配がない俺は留衣の隣を歩きながら、足下の水たまりを見つめて歩いた。大通りから駅までの道のりを歩く俺達の横を数台の車が走り抜けていった。何を考えるでもなく帰路に就こうとしていた俺にいつの間にか信号の前で足を止めていた留衣が声をかけた。

「……ちょっと」
『？』
駅までの道は直線。道路を横断する必要はないはず。傘から顔を出した留衣が、歩道の反対側を指差して言った。
「図書館に行きたいんだけど」
『図書館？何で？』
首を捻る俺に留衣は顔を背けて、一言こう告げた。
「前、借りてた本があったから」
『……？』
その時、丁度歩行者用信号が青に代わり、留衣は向こうの歩道へと足を進めた。俺はまだ慣れない道にキョロキョロしながらその後を追う。
入り組んだ道に入っていく留衣に、俺は後ろから声を上げた。
『なぁ、留衣。さっきのとこ……あの女の子いなくなってなかった？』
ふと足を止めた留衣が追いついてきた俺に首を傾げ、そして思い出したように言った。隙間を埋めるように立ち並ぶ裏路地の店。生暖かく、湿った空気が不快だけれど慣れてしまえばそんなに気にはならなかった。
「ああ……消えたんじゃないの？それとも……」
『それとも？』

聞き返した俺に留衣は珍しく視線を下に投げた。何かを口に出そうとして、そして止める。

「……何でもない」

いつもと違う様子の留衣に首を傾げながら俺はふともう一度あの十字路を振り返った。視界不良の雨の中でひっそりと置かれた花束が虚しくも雨にうたれ、水滴を溜めていた。事故多発の表示も水滴の後を作り、だんだんと汚れていく。

『ああやって忘れられていくんだな……』

そんな俺の独り言は留衣に届いたかは分からない。黙々と足を進める留衣は何も言わず目的地を目指した。

白を基調にした外形が印象的な図書館が雨雲に曇った空を背景に佇んでいる。光の差す隙間もない薄暗い空は、その風景を陰鬱に彩っている。駐車場を越え、入り口前まで着いた留衣は傘を畳むと、俺を振り返ってこう言った。

「…すぐ終わるから外にいてくれる？」

『え？あ、分かった』

自動ドアを開けて中へ入っていった留衣。俺はそれを見送った後、都会の雨の風景に視線を戻した。雨のあたらない所に立ってはいるけれど、やっぱりこうゆう風景を見ていると少し寒いような気がしてくる。上着を着ていない自分自身を少し悔やんだ。

もうすぐ夏になる。梅雨の時期も終わればすぐ暑くなってくるだろう。俺はその頃、どうなっているだろう？消えているのか、それとも…。

いつまでも決断を下さないわけにはいかない。雨音がそんな俺の心持ちをたたみ掛けるように鳴り響く。俺の中を渦巻くのは、『消える』ことに対する怖さ。体もないから痛みを感じるわけはない。けれどそれでも恐怖心が湧き上がってくるのは何故だろう？

無に還る。心も、記憶も、全てが消えて…無くなる。いつか忘れられていくのかもしれない。自分を知る人もいなくなって、忘れ去られていく。それは誰だって同じなのに。かき回されるように混乱していくのはいつものこと。けれど時計は動きを止めることはない。永遠に回り続ける。

けれど、誰も永遠に生き続ける者はいない。存在し続ける者はない。

（俺は…）

何かの音が耳元に届いた。けれど、俺の視線は果てない雨雲の向こうに向けられたまま。ふと、あの怪訝そうな声が聞こえる。

「…何してるの」

留衣の、夜を思わせる黒髪の下から覗いた瞳が、不審そうにこちらを見ている。俺は答えた。

『いや、なんでも…』

首を振る俺は、見上げてくる留衣の右手に視線が止まった。留衣も俺がそれに気付いたのを見て、俺の目前に表紙を押しつけた。

「…この間来た時、見てたでしょう？」

『あ…』

そう言えば。島崎達と図書館に来た時、本棚の前で足を止めてしまった記憶がある。

「あの本棚でアンタの見そうな本はこれだけだったから」

古ぼけた題名と、表紙絵を見た俺は微笑って頷いた。油絵で描かれた表紙絵の名前は、睡蓮連作…睡蓮を題材に絵を描いたことで有名なクロード・モネの美術書だ。

『これ、俺に？』

思わずそう言ってしまった俺は、留衣の一段ときつい一瞥をくらうことになってしまった。別にアンタの為に借りてきたわけじゃない、と罵倒が飛ぶ。その割に、睨んだ後留衣は本を鞄の中に入れ、顔を隠すように傘を広げると足早に歩いていった。

雨の降りしきる中を俺もその後を追って追いかける。緩む口元を抑えて謝っても、すぐには機嫌を取り戻してはくれなかった。

☆

雨音が途切れ、重苦しい雨雲が去っていったのはその日の夜だった。湿った地面が乾き始めるのは明日になるかもしれない。俺は出窓に腰かけて、そこから外を見ていた。雲間から朧気な光が差し込んでくるが、まだその全体が姿を現すことはない。テレビから流れる天気予報が、明日の快晴を予言していた。

「ちょっと。借りてきたのに見ないわけ？」

『見る、見る』

まだ雲が開けるには時間がかかりそうだ。俺もダテに空を見ていたわけじゃないから、いつ頃月が見られるようになるかは見当がつく。

俺は出窓から降りて、留衣の隣に座った。暑苦しいと顔をしかめる留衣だったけれど本を見ているうち、いつもの表情に戻った。無表情のように見えるけれど、それが留衣の表情。

モネの睡蓮画は睡蓮の草花と水の動き、空の色を反射する水面をよく捉えている。昼夜変わるその風景に、晩年のモネは引き込まれたのだ。第1次世界大戦の年、彼は逃げる事もせず、ただ一心に睡蓮を書き続けた。

ただ見るだけで満足してしまうような華やかさではなく、そこにある一つの光彩や水鏡の映しだした風景。何処にでもあるような、そんな一つの光景に独自の魅力を見つけたモネは、死ぬまで睡蓮を書き続けたという。

（……死ぬまで、か……）

ふと熱風が網戸越しに部屋の中を通り過ぎた。行き場所のないその空気は途中で道を見失い、ゆっくりと消えていく。団扇を片手に暑苦しそうに顔を仰ぐ留衣の髪がふわりと揺れた。

俺はふと、先程まで腰掛けていた出窓を見上げる。四角形の窓枠の向こうに見えるのは夜を知らない眠らない都市と、天空から目映い月光を放つ満月。雲一つない星空が、梅雨明けを示すかのようだった。

『……なぁ、留衣？』

「何」

視線を美術書の方に落としたままの留衣に俺は言った。真っ白な

球体が指し示すのは、明日の快晴。テレビから流れるニュースの音がいつの間にか、遠くで鳴っているようなそんな気がした。

『明日、あの丘の公園に連れてって欲しいんだけど……いいかな？』

ふと、留衣が顔を上げた。扇いでいた手を止めて、こっちを振り向く。

「……別にいいけど」

もしかしたら、気付いたのかもしれない。俺が答えを出そうとしていることに。留衣は一瞬首を傾げてそう言うと、また視線を美術書に落とした。

熱帯夜を予感させる風は街を覆い、虚空には月が浮いていた。歩道の並木から梅雨の雫が落ち、その葉が乾いてゆく。常緑の葉が夏色に染まり始めると、もうすぐ次の季節が来る。

夏という、新しい季節が。

終章　夕暮れに染まる榛の丘を

練習試合の前日、留衣が連れて行ってくれたコンビニから左折して、緩やかな上り坂を登る。駅裏の通りは夜とは違い、車や人の往来が激しかった。駅付近から聞こえる中学校の鐘の音に、流れる榛の空が凄く似合っているような気がした。電球の切れかかった古い電柱も、所狭しと並べられた住宅の屋根の連なりも。いつの間にか日常の風景となってしまった街の風景は心なしか少し侘びしいような、そんな気分さえも思い起こさせた。

どこからか聞こえてくる遮断機と電車の走る特有の音。ふと振り向いて見下げた住宅街の風景が１つ、また１つと明かりを灯した。東の空からは薄暗い藍色の空が大地を包み込むように広がりつつある。けれど俺はそれとは反対に、まだ夕焼けの色を残す西の丘へ、その中心にある公園へと歩みを進めた。

『あ、留衣。そういえば、部活……』

「部長に了解は取ってきた」

癖のない直線の髪を耳にかけて留衣はそう答えた。下校途中に遠回りをしてくれた留衣は、まだ学校帰りの制服のまま後ろを歩いている。その姿が、初めて会った時と全く同じに見えた。

「雛を説得するのには時間がかかったけど」

溜息混じりにそう告げた留衣は、恨みがましくこちらを見た。一体誰のせいだ、という視線を向ける留衣に俺は苦笑を浮かべながら謝罪の言葉を口にした。

『ごめんって。……だけど、決めたら言ってしまわないと決心が揺

らぐから……』

俺の言葉に、留衣の視線が訝しげなものに変わる。乾いたコンクリートを足早に歩きながら、俺はふと向こうに見えてきた公園を指差した。

『あ。あそこだよな？』

あの時は夜だったのでよく周りを意識していなかったけれど、丘の公園は住宅地の合間に作られた、本当に小さな場所だった。ブランコと、小さな砂場、２つしか並んでいないベンチ。昼には見られるであろう子供達の姿も、夜の帳が降り始めた今の時間帯では、その影すら見受けられない。風に小刻みに揺れたブランコが長い影を落としていた。

一番奥にはフェンスで囲いのされた見晴らしのよい展望台があり、そこからは無数に広がる都会の風景が見て取れた。榛色の空に反射した幾つもの屋根が同じ色に反射している。まるでオレンジ色のフィルターをかけたような景色に、俺は感嘆の声をもらした。

ふと、空を見上げてベンチに腰を下ろした留衣が怪訝そうな顔をした。その視線に誘われて俺も空を見上げると、そこにはいつの間にか小さな雨粒が雫を落とし始めている。地面に小さな染みが出来て一つの模様のようになっていく。

雨が、音を立て始めた。

『留衣、傘持って……ない、か』

当然だというような視線をこちらに向けた留衣は、天に視線を向けて言った。

「夕立でしょ？…すぐ晴れるんじゃない？」

確かに、降り続ける雨とは対照的に空は榛色の夕焼けに染まったままだ。雷雨というわけでもなく、土砂降りになるような気配もない。留衣は座ったまま、こちらに視線を向けると落ち着いた顔つきでこちらを見た。

「……それで、どうするの？」

湿気る空気の中で雨音が反響する。地面を全て覆い尽くすように落ちてきた雫が濡らしていった。至高の空に浮き出た、時空を越えて輝きを放つ月の姿が綺麗に思えた。今だけじゃなくて、生きていた頃も、死ぬ間際もずっと……。

月光の光に誘われて、俺は口を開いた。

『あの美術書の人はさ、第1次世界大戦の時もアトリエから逃げなかったんだってさ』

急にそんなことを話し出した俺に、留衣は首を傾げ、それでも口を挟むことなく、俺の言葉に耳を傾けていた。降りしきる雨が俺の言葉をかき消そうとするけれど、留衣にこの声が届いているということは、俺がここにいる証。生きている者としてではないけれど、確かに俺はここにいる。

『全てを捨ててここを離れるよりは、制作中に死んだ方がマシだって、そう言ったらしいんだ』

雨音が地面を叩く音。けれど俺はその雨に体をぬらす事もなく、通り抜けていく雫を見上げて果てしない空を仰いだ。

『死んでしまったら、絵を描くことも出来なくなるのにその人はそ

う言ったんだよな』

それがきっと彼の存在理由だったのだと思う。絵という生き甲斐を捨ててしまう事はきっと本人にとっては自分が死んだのと同じことだったんだろう。そこまでして、彼は1つの絵を描き上げたかった。

夕闇が迫りつつある榛色の風景は、どこまでも遠くまで続く果てない都会の美しく見える瞬間。人の作りあげた一つの文明が、一瞬時を止めたかのように見えるこの景色がなによりも綺麗に見えた。空には沈みかけた太陽が最後の光を放ち、反対側では月が照り始める。

夕立に濡れた草木の露が夕焼けの色を反射して、淡く光った。風に揺れ、儚くもその雫が地に落ちていく。

「……」

『留衣。俺……』

俺と同じようにフェンスの向こうを見つめていた留衣がふとこちらに視線を向けた。俺は編み目越しの天空を見つめ、触ることの出来ないフェンスに手を伸ばした。案の定、通り抜けた色の薄い手を、昇り始めた月に向かって伸ばし、そして下ろした。

もう、高望みはしない。死んでいることに、動揺したりなどしない。

『月を見ていた気がする……』

その不機嫌そうな声に振り向いたその時から、俺の記憶は朧に光る月夜の風景しかなかった。自分が死んでいることも分からず、果てしない宇宙の中心に浮かぶ月を見上げて、誰かを待っていたのかもしれない。死というものに翻弄されて、存在しないことに動揺し

て。
けど、君の声で俺の中の溶けかけた世界が形を成した。やっと、分かったんだ。

俺はまだ、何もしてない。

『俺……いつ消えるか、分からないけど。留衣の邪魔になるだけかもしれないけど……もう少しこうして生活しててもいいかな？いつか、俺が完全に消える時まで』

振り返って告げた言葉に、留衣は何も反応を示さなかった。自分の横に置いていた鞄を手に取ると、盛大に溜息をついてこちらを呆れたような目で見つめた。

「……アンタ、私が嫌だっていったらどうするつもりだったの」

眉根を寄せてそんな表情を浮かべた留衣に、俺は微笑って見せた。島崎や、藤堂がいつも留衣を言いくるめる時みたいに。
留衣は断らない。俺にはその自信があったから。

『その時はその時。……だって断らないだろ？』
「……アンタ最近自身過剰なんじゃないの？」

留衣はそう言ってまた溜息をついた。黒髪を滑り落ちる雨の滴が、地面へと落ちた。制服に付いた水滴を払い落として、留衣はまた空を見上げる。榛色をした虚空には、いつの間にか薄い虹が架かり、都会の風景をさらに彩っている。
視線を戻して留衣は公園に背を向けて歩き出した。また、初めて

出逢った時のように俺が留衣の後ろを追いかけようと足を踏み出した時、留衣の声が凛と響く。
雨音が徐々におさまりつつある中で、その言葉はしっかりと聞こえた。

「行くよ、蓮」

あまりにも自然に出てきたその言葉に、俺は危うく頷きかけた。はた、と足を止めて、思わず聞き返す。

『……え？』

歩みを止めた俺に、留衣は嫌そうな顔をしてこちらを振り返る。面倒くさいという表情を全面に出した彼女は、俺を睨みつけるように見つめる。

「名前。考えとくって言ったでしょう？」
『あ……！』
「嫌なら別にいいけど」

顔を背けて足早に歩き出した留衣に、俺は慌てて声を上げる。

『ちょ、嫌じゃないって、留衣！』

湿ったコンクリートの上を俺は留衣を追いかけて走った。小降りになった雨はゆっくりと流れていき、公園の草花は生き生きと輝きだした。どこまでも果てしなく続く住宅地の風景が広がる丘。目映い程の夕焼けがいつの間にか西へと移動していき、夜が訪れる。

色味を取り戻しつつある球体は、いつの間にかその形を成し、ゆっくりとその明かりを地上に送り始めた。何億年と変わることのない月が、光り続ける。

榛に染まる夕立の丘を。

fin.

終章　夕暮れに染まる榛の丘を（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。少々設定を間違い、ここで『完結』に設定するのを忘れてしまったため、次回の番外編を更新して完結とします。

ありがとうございました！

番外編　もう一つのクリスマス・キャロル

『……約束。クリスマスには、3人でお祝いすること』

冬の曇り空の下、神社の境内。その下で、子供たちが遊んでいる。初雪に歓声を上げながら、少年がふと思い出したようにそんなことを言った。隣にいた少女が微笑む。

『うん。三人で』

肩で綺麗に切りそろえられた髪を揺らしながら、少女はもう一人に振り返って言う。杉の木に降り注ぐ雪を見つめていたもう一人は、曖昧に笑って二人を見た。

少年はいつも何も言わず、いつも微笑むばかりだった。声が出ないのか、それとも何か障害があるのかは分からなかった。それでも、よく少年と少女が二人で遊んでくるとやってきて、仲間に加わった。

気にすることは殆どなかった。もともと少女も少年も饒舌なほうではないし、外交的でもない。だからこそ、この内向的な三人の子供の図は、はたから見れば不思議なものだっただろう。

『じゃあプレゼント、買ってこないと』

そう呟いた少年に、少女は頷く。

『何にしようかな……』

悩み始める二人に、無口な少年は微笑んだ。その笑顔は、どこか寂しげで、それでいて暖かな微笑みだった。微笑んだまま、少年は少女の肩を叩いた。そして指先を空に向ける。共に悩んでいたもう

一人も、首を傾げて空を見た。
白く染まった空の上から、ちらちらと何かが舞い降りてきていた。
「……雪？」
二人がそう言って振り返る。しかしそこに、先ほどまでいた少年の姿はなかった。雪が地面に到達し、ゆっくりと境内の土の中に溶けて行く。
彼がいなくなるのは、いつも突然だった。現れるのも突然だった。それでも、あの時以来、彼が私たちの目の前に現れたことはなかった。

☆

秋のイベント、ハロウィンが終わると、街はすぐ緑と赤のクリスマスカラーに一変する。帰り道の街路樹にも電球が取り付けられて、暗くなればイルミネーションが目に眩しく感じられるようになった。
俺は幾人もの学生たちの間をすり抜けながら、少し前を歩く一人の女子生徒を追いかけた。背中まである黒髪が、歩みを進めるたびに揺れている。身長は女子の平均より少し高めで、俺と並んでもあまり差はない。もっとも、俺はこれから一ミリも伸びることはないだろうから、もしかしたら俺の方が小さくなることだってありえるかもしれないけど。
俺は数人の男子の塊をすり抜ける。肩が触れたけれど、感触はない。相手は俺のことにすら気付いていないと思う。俺の体だけがすっと帰り道の薄暗闇に解けて、そしてまたもとの通りになった。
「留衣、ちょっと待って……」

少し大きな声をあげてみるけれど、多分誰にも聞こえていない。聞こえているとしたら、俺の目の前にいる女子生徒だけだ。俺はすたすたと歩く彼女の隣まで来て、やっと大きく息をついた。
日本人らしい、落ち着いた黒の瞳が刺すように俺を見る。彼女、榊　留衣はため息を吐いて呟いた。

「遅い」
「そんなこと言ったって、ちょっと余所見してただけなんだし……」
冷たい視線で見られ、俺は気まずくなって言い訳をやめた。ゴメンナサイ、と早めに謝って、留衣の隣を歩き始める。
「……あんたに付き合って歩いてたり立ち止まったりしてたら、挙動不審に見られるでしょう？」
留衣の声が白く染まっている。俺はそれを見つめながら、もう一度同じように謝った。そしてふと、真っ白な留衣の手を見つめる。
「……留衣、そろそろコートとか、手袋とか、出してきたほうがいいと思うんだけど」
「……ああ」
やっと自分の手の冷たさに気付いたような顔で、留衣は答える。右手を握ったり広げたりしていた留衣は、それを制服のポケットに突っ込んで、更に歩くスピードを速めた。
俺はそれを追いかけながら言う。
「俺少し前にも同じこと言った気がするんだけど」
「そう」

学校前の通りから駅前へと歩みを進めていくと、ツリーの飾ってある店や、電飾に凝ったカフェ等も沢山ある。俺はその一つ一つに視線を向けながら、留衣の後を追った。

クリスマスまで、あと少し。通りや店、宣伝ポスター、そんな様々なものがクリスマスを謳い始め、どこからか鈴の音さえも聞こえてきそうな雰囲気だ。ＢＧＭが流れるＣＤショップには、クリスマスソングが並べられている。有名歌手や有名グループが一斉に聖夜を主題にした歌を発売し、テレビでは特別枠の２時間番組の文字が躍る。

どこもかしこもクリスマス一色だ。これが過ぎると一気にお正月ものに変わるんだろうな、と思いながら、俺はある店の前に張り出されたポスターに目を向けた。そこには、イチゴの乗ったショートケーキを中心に、クリスマスケーキの宣伝が書かれている。

「あ、ケーキ……」

甘いものは嫌いじゃない。毎日欲しいってほどじゃないけど、時々凄く食べたくなるときがある。俺は留衣の後を追いながら、ケーキのポスターを見つめた。そして視線を留衣に戻すと、どうやら俺の言いたいことに気付いたような顔で、留衣が言った。

「ケーキを買えとか言い出すんじゃないでしょうね」

「あ、分かった？」

留衣は心底嫌そうな顔で俺を見る。先に言っておくけど、と留衣は言う。

「ワンホールなんて食べられないからね」

「……じゃ、じゃあ切ってあるヤツ、とか」

安いやつでいいから、と呟くと、留衣は大きくため息をついた。断られるかもしれないと思ったけれど、意外にも留衣の返答は色よいものだった。

「……買ってくればいいんでしょう」

今日は駄目だからね、と付け加えて、留衣は駅へ向かって歩いていく。その後ろ姿を見ながら、俺はめいいっぱい飛び上がった。

「やったー！」

そう叫んで、留衣を見ると、いつもなら立ち止まって煩いと睨みつけてくるのに、今日はすたすたと駅に向かって歩いていった。俺はふと首をかしげ、そしてまた留衣の後を追う。

なんとなく隣に並ぶのが憚られて、少し後ろを歩いていった。

☆

テスト、そして冬休みと、学生の毎日は忙しく過ぎていく。今はもう生きている身じゃなくなった俺でも、留衣と共に生活しながらそう思った。

俺は、所謂幽霊というやつだ。体がなくて、何にも触ることが出来ず、何も食べることが出来ない。足は一応透けているものがついているだけで、あまり役に立っていない。

俺が死んだのは、今年の6月。都内の高校で、美術一本の人生を送っていた。友達と呼べる人間も少ないし、人生は全部絵の為にあるようなものだった。

でも、ある日、事故に会って死んだ。　留衣と会ったのはそれから少ししてからだ。死んだことにすら気付いていなかった俺は、彼女と出会って、もっと此処にいたいと思った。たとえ生きていなくても、たとえ誰に気付いてもらえなくても。俺のことを分かってくれる人間が、留衣しかいないとしても。

そして俺と留衣は、この奇妙な生活を送り続けている。

「留衣。……改めて聞くけどさ、クリスマスってまともに祝ったことある？」

クリスマス・イヴの前日。俺は留衣の買ってきたクリスマスケーキを見つめながら、呆然とそう呟いた。俺の視線の先には、皿の上に置かれたケーキがある。でもそれはショートケーキでもチョコレートケーキでもなく、なぜかチーズケーキ。

留衣は夕食の準備をしながら、こちらを振り向かずに答える。

「安いケーキでいいって言ってたのは誰？」

「はい、俺です……」

俺はうなだれながらそう言うと、チーズケーキを見下ろしてため息をついた。台所からは包丁がまな板を叩く音が聞こえてくる。つけっぱなしのテレビからは、ＣＭが何度も移り変わっていく音が聞こえていた。ふと、俺の目がそちらに吸い寄せられる。耳慣れたクリスマスソングが流れてきていた。

『Ｊｅｓｕｓ　Ｂｏｒｎ　Ｏｎ　Ｔｈｉｓ　Ｄａｙ』１５秒かそこらのＢＧＭに、気分だけでもと鼻歌を歌い始める。ブラウン管の中では、有名女優が聖夜の奇跡を演じる感動２時間ドラマの映像が流れていた。クリスマスはどうしてこう、ドラマとか拡大番組が多いんだろうと、そんなことを考えながら、一番の盛り上がりの部分を歌おうとしていたとき、ふとテレビ画面が切り替わった。

振り返ると、リモコンと新聞を片手にテレビを見下ろしている留衣の姿がある。お笑い番組の賑やかな笑い声を冷淡に聞きながら呟く。

「……何、見てたの？」

「え？あ、別に……」

俺は首を振って、台所に戻っていく留衣の姿を見つめていた。包丁の音がまた鳴り始める。俺はふと首をかしげて、留衣に声をかける。

「留衣、あのさ、もしかして……」

留衣は何も言わず、手元だけを見ている。規則的な音が止み、留衣は振り返った。何、と不機嫌そうな顔で言い、煩そうに俺を睨みつける。

「えっ、あ、あっと……」

一瞬怖気づきそうになった俺は、言いたいことを頭の中で整理しなおして、一番的確な言葉を発した。

「……クリスマス嫌い、とか？」

「別に」

即答でそう言うと、留衣は俺に背を向けて、また包丁を動かし始める。俺が更に言いかけた時、部屋の奥から珍しく電話の鳴る音が響いた。設置してあるだけで、さほど意味を成さない電話。それがなったことに、俺は驚いて振り返る。

留衣は時計で時間を確認すると、不機嫌な様子で電話を取りに行

った。受話器を持ち上げ、留衣は不機嫌な声で応答する。

「……何？」

相手の声を聞いてから、留衣はそう言った。知り合いだろうか、と首を傾げてそちらを見る。留衣は面倒くさそうな表情のまま受話器の相手に話しかける。

「……そう。それで？」

表情から見ても、相手は藤堂や島崎ではない。両親にしては、応答が投げやり過ぎる。

「ああそう、言いたいことはそれだけ？」

気分を害しているのを隠そうともしない。切るよ、と告げると、留衣は受話器を荒々しく置いた。妙な空気が後に残る。電話の相手が気になったけれど、俺はあえて言わないでおくことにした。

留衣は電話を背にして、台所に戻ろうとする。その瞬間、電話がまた鳴った。留衣の表情が固まる。俺は首を傾げた。

「……さっきの人、とか？」

留衣は無言のまま、電話に近づき、それを見下ろした。そして今度は電話線に手を伸ばす。それを引き抜くまで、迷いは無かった。電話は止まり、そしてあたりが静寂に包まれる。

留衣の行動に、俺は慌てて言った。

「る、留衣、そんなことしてると電話が……っていうより、相手は……」

自分でも何を言っているのか分らなくなっているところに、留衣の冷たい声が響く。

「さっきの人間じゃない。だいたい、何度も電話をかけてくるような性格じゃないから」

誰、と言いたいのを抑えて、俺は頷いた。それでもまだ何か、引っかかるものがある。俺は電話の前に立ち尽くした留衣の背中を見つめた。

「留衣……？」

留衣は呆然としたまま、電話を見つめている。その顔を覗き込むと、唇が動いた。

「……来る」

「え……？」

俺がもう一度、引き抜かれた電話線のコードを見つめた瞬間、電話が鳴り出した。規則的に、何度も、家の主を急かすように鳴り続ける。背筋をすっと何か冷たいものが触れていったような寒気が起こり、テレビの音が遠く聞こえた。

俺ははっとして留衣を見た。ふ、と留衣の手が受話器に伸びる。

「……だからクリスマスなんて嫌なのよ」

そう言いながら、留衣の顔は蒼白だった。受話器が耳に押し当てられる。

☆

彼は私が独りでいるときも現れた。そしていつも私が遊んでいるのを見つめて微笑んでいるのが日常だった。彼と私たちは、大体目を見て会話が出来た。何が言いたいのか、私たちには分かったし、彼は私たちの心を、簡単に読んでみせた。

『……喧嘩？してないよ』

ある時私は神社の杉の木の下で一人遊びをしていた。ただ土いじりをしていると、彼はどこからか現れて私の隣に座っていた。

彼は私達が嘘をつくとすぐに首を左右に振った。

『でも、あっちが……』

彼は見た目で言えば私達より少し年下に見えた。それでも、中身はずっと大人びていて、それはまるで兄のような存在だったのを覚えている。

私はふてくされると、いつも無言になった。怒られたとき、後悔しているとき、いつも無言だった。そんな時、いつも彼は微笑んで頭を撫でた。

『……』

彼の手は暖かかった。そう記憶している。いつも、彼は喧嘩の仲裁役。彼の微笑みには、私たち二人のどちらも勝つことが出来なかった。

彼の手の感触を、今の私は、思い出すことが出来ない。

☆

クリスマス・イヴ。俺はクリスマス特番を見つめていた。留衣は夕食を作っている。俺は唯一の楽しみのケーキがチーズケーキだったことに落胆して、テレビのＣＭに視線を移した。

クリスマスソング『Ｊｅｓｕｓ　Ｂｏｒｎ　Ｏｎ　Ｔｈｉｓ　Ｄａｙ』を聞きながら、ふと予感がよぎった。俺にはなんとなく、次に起こることが分かるような気がした。振り向くと、留衣が新聞を取り上げて、リモコンを握る。その先をテレビに向けようとした瞬間、俺は叫んだ。

「ストップ！！」

「……はあ？」

あまりに急にそう叫んだから、留衣は怪訝そうな表情を浮かべてそう言った。俺はただ直感に任せて留衣を止めてしまったので、自分でも理由が分からずオロオロと言い訳の言葉を捜した。

「……何？」

ＣＭが終わると共に留衣はそう言った。

「え、えっと、あの、ほら……なんか、こう、こんなこと前にもあった感じが……」

留衣は訳が分からないといった表情をしながら、口を開く。

「そんなことが言いたくて止めたわけ？大体、私は幽霊とクリスマスなんて、今まで一度も……」

冷ややかな言葉に肩をすくめていた俺は、留衣の言葉が途中で消えたので顔をあげた。留衣は戸惑いを浮かべた蒼白な顔で足元を見つめている。頭を押さえて、テーブルに手をついた。

「……蓮」

座り込んでしまった留衣が、そう呟いた。

「今日、何日？」

「えっと、２３、……じゃなくて２４日」

俺はカレンダーを見つめながらそう呟いて、そしてふと気付いた。俺の心の中を代弁するかのように留衣が呟く。

「昨日……電話をとった後、何があった？」

「……覚えてない」

俺の声を聞いた留衣はすぐに電話に駆け寄り、電話線を確認する。それはしっかりと、外されたままだった。留衣はコードを持ち上げ、そして目を瞑る。

数十秒間、留衣はそうしていた。そしてコードを元に戻すと、ため息をつく。

「る、留衣は？あの後、何か聞いたり、とか……」

「何も聞いてない。受話器に耳をあてて……その後は」

ここにいた。丸一日の記憶を無くして。俺は無い血の気が引くよ

うな思いにとらわれた。留衣は表情を蒼白にしながらふと時計を見る。

「昨日、あの電話がかかってきたのは……7時半過ぎ」

時計は七時半を指している。俺は寒気に腕を押さえながら、留衣に言う。

「留衣、留衣っ。それより、お札とかお守りとか……」

「あんたも弾き出されたいの？家から」

「うっ。それは……」

嫌です、と言おうとした瞬間、玄関でチャイムの音がした。留衣が反射的に振り向く。何度も鳴り響くチャイムの音に、留衣は意を決して立ち上がった。俺は慌ててその手を掴む。

「留衣っ」

残酷にも俺の手は、留衣の手をすり抜けた。留衣はそのまま、玄関へと歩いていく。その背中を見つめながら、俺は不安にかられた。

「留衣、待っ……」

俺の声もむなしく、留衣は玄関へと向かっていった。

☆

チャイムは鳴り響いている。私はドアノブを掴み、神経を集中さ

せた。そして全神経を集中させて、ドアノブを捻る。外に何がいるのか、何が起こっても反射的に反応できるように。
そして、ドアを押した。

「一体、誰……」
「さーちゃん、メリークリスマース！！」

目の前で何かが弾ける音と共に、私の目の前に現れたのは雛だった。どこから持ってきたのか、クリスマス用の赤い帽子に、手袋をはめてニコニコと笑っている。

「雛……何、それ」
「サンタクロースだよう、ほらほら」

私は先ほどまでの緊張を吐き出すようにため息をついた。緊張と共に、力と、雛の相手をする気力が失われていくような気がしたけれど。
雛は私を見上げて、ポケットの中から一つの袋を取り出した。それは、本当に小さな袋だった。

「で、さーちゃんにプレゼント！あ、まだ開けないでね。明日の朝まで冷凍庫に入れといて～」
「はあ……？」

食べ物？と聞いても、雛は意地悪な微笑みに笑うだけ。私は首をかしげながらそれを受け取る。

「私、何も返せるものないんだけど」
「んーん！いいの、いいの。メリークリスマス！！あっ、それじゃ、まだ渡す人がいるから。じゃーね、さーちゃん」

雛はニコニコと走っていくと、振り返って足を止めた。こちらに手を振って、少し大人びた笑顔で笑う。

「メリー・クリスマス！！留衣ちゃん」

「……メリークリスマス……」

嵐のように去っていく雛を見送って、私は包装されたプレゼントを見つめた。玄関から台所に行き、冷凍庫を開ける。無造作にそれを突っ込み、そしてその下の冷蔵庫のドアを開ける。そろそろ蓮がケーキが食べたいと言い始める頃だろう。私はジュースを取り出そうとして手を止めた。

「蓮、ジュース何にするの？」

コーラとサイダー、そしてオレンジジュース。私の手は、冷蔵庫の扉を開けたまま、蓮の答えを待っていた。

「ちょっと、蓮？」

くだらないことで悩んで、とため息をついて私は顔をあげた。冷蔵庫の扉を閉め、部屋の中を覗く。相変わらず流れ続けるＴＶの音が、私を迎えた。そして、いつもなら私を嬉々として迎える、あの暢気な幽霊の姿は見当たらなかった。

「蓮？」

☆

クリスマスの日、私達は二人分のプレゼントを用意して彼が現れるのを待っていた。けれど、いつまで経っても彼は神社に姿を現さなかった。いつまでも、いつまでも待っていたけれど、彼はそこに現れなかった。

『用事、かな……』

『……うん』

その年は大雪だった。神社には地面が見えなくなるほど雪が積もり、私達は社の屋根の下で雪があがるのを待っていた。けれど、なんとなく、彼はもう来ないのかもしれないという確信だけが、胸の奥にあった。

ぼんやりとした悲しみが、心の中を重くした。根拠もない思い込みと、予感。泣くほどのことじゃなくて、それでも、それは悲しみと呼べる感情だった。

『……あ』

ふと、神社の奥のほうから、母の呼ぶ声が聞こえた。どうやら寒いから家の中に入れと言っているようだった。私はもう一人の手を掴み、言う。

『行こ』

私達は雪の中を歩き出した。神社の賽銭の上に、近所の子供たちが作ったらしい小さくて不恰好な雪だるまが置かれていた。

積もった雪が、私達の足音を消しとっていくように、静かな一日だった。

☆

「蓮……？」

私はそう呟いて、そしてふと携帯のバイブ音に顔をあげた。ベッドの上の携帯が、唸り声を上げている。開くと、メールが来たようだった。島崎　雛、という表示が画面の中に浮かび上がる。

『Ｆｒｏｍ：島崎　雛　題名：メリークリスマスっ！！』

『さーちゃん、メリー・クリスマスぅ！！さーちゃんは今お家？それともアパート？私は家族でクリスマスパーティ中だよ～！あ、そうそう、プレゼントは部活の日に渡すから、楽しみに待っててね。それじゃ、良いクリスマスを～！！あ、部活は遅れないようにね～。ではでは！』

私は携帯を握り締めたまま、視線を空中へと彷徨わせた。さっき玄関で雛に会い、プレゼントをもらった。そして去っていく所まで、しっかりと見送った。それを思い出し、そしてまたメールの文章を読み返す。

そして、いなくなった蓮のことを思った。

「……蓮……？」

私はそう言いかけて、ふと振り向いた。私の背後に位置する電話が、またコール音をあげ始めたからだ。私は携帯を握り締めたまま、電話へと近づいていく。コール音が、耳元で鳴らされているかのような錯覚に陥りそうだった。

「……」

私は、受話器を握る。そして、それを耳元へと運んだ。

何かを聞いた気がした。けれどそれが何かを完全に理解する前に、頭の中が真っ白になった。そして先日のように、そこからの記憶が、私の中から消え去っていた。

☆

「……い、……留衣、……留衣っ！！」

耳元でそんな声が聞こえた。聞きなれた声に私は顔を顰めて、目を開ける。目蓋が重たい。深い眠りから無理やり起こされるような最悪な気分だった。

目を開くと、すぐそこに蓮の顔があった。私の顔を見て、安心したように声をあげる。

「留衣！良かった……無事だった」

「……煩い」

耳元で叫ぶな、と睨みつけても、蓮はただ安堵したように気の抜けた表情をするだけだった。私はため息をつき、そしてふと顔をあげる。

「……今何時？」

そう言うと、蓮は時計を見上げる。

「9時過ぎ。……朝の」
私は顔を顰め、体を起こした。部屋の空気が寒い。
「で、結局あんたは何処にいってたわけ」
「何処にって言われても……記憶がなくて……」
「雛が来たこと、覚えてる？」
私は手元に落ちていた携帯を拾い上げると、履歴を確認しながらそう言った。イヴの受信メールの中に、雛の名前を探すのは簡単なことだった。そしてはっきりと、昨日の夜に目にしたメールを見つける。
こちらが本当なら、昨日の夜にあった雛は……。私は、雛が最後に私のことを『留衣ちゃん』と呼んでいたことを思い出す。
「ええっと……留衣を止めようとして、で、気付いたら……朝だった」
「……結局何も覚えてない、と」
私はもう一度昨日のことを思い出そうと頭を動かした。蓮が消えたのは、多分私が雛の対応をしていた時。正確に言うならば、雛の姿をした相手。あの時、プレゼントを貰った私は、それを冷凍庫に入れた……。
「……留衣？」
私は台所に行き、冷凍庫を開けた。そこには、昨日私が無造作につっこんだままの包装紙が置かれている。
それをテーブルの上に持って行き、リボンを引いた。簡単に紐が

解け、袋があく。蓮が中身を覗いた。

「……あ！」

それは、小さな雪だるまだった。不恰好で、それでも顔やボタンまでしっかりと作られている。

『メリー・クリスマス、留衣ちゃん』

「……あ」

あの時、雛の姿をした誰かが、そう言ったことを思い出した。私のことを『留衣ちゃん』と呼ぶ人は、後にも先にも一人しかいなかった。神社に居た頃、どこからともなく現れ、そしていつの間にか消えた私の友人。私の名前を呼ぶときは、いつも筆談だった。

霊と人の区別が出来なかった頃の……私達にしか見えない友人だった人。

私は窓に歩み寄り、カーテンを開け放した。外には、いつのまにか薄らと雪が舞い降りている。私は窓を開け、ベランダの片隅に雪だるまを置いた。そして片隅の幽霊に問いかける。

「蓮。そろそろケーキ食べようか」

雪は降り続き、数年前と同じくらいの降雪量になった。私はベランダに積もった雪を丸めて固め、雪だるまを作った。綺麗に丸まった雪球に、小さな雪をくっつけ、目をつくる。そしてそれを、プレゼントの雪だるまの隣に置いた。

２つ並んだ雪だるまが、窓を飾っている。ＴＶからはクリスマス・キャロルが流れてきた。

メリー・クリスマス、もう会うことのない人へ。

FIN

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0094q/

宵待草の憂鬱

2011年1月15日20時21分発行